南海

茶之湯評林大成

四

434

茶湯評林巻之四目録

臺子比習
以真勝手臺子棗之乱ノ茶碗薄茶点ル手前
逆勝手臺子中次重茶碗薄茶点ル手前
逆勝手臺子躙ノ手前大海乱ノ茶碗
逆勝手臺子薄茶点ル手前
一四疊半以真勝手出炉薄茶点ル手前
一四疊半逆勝手出炉薄茶点ル手前
一四疊半以真勝手角炉薄茶点ル手前
一四疊半以真勝手向炉薄茶夜比手前

一 疊半逆勝手出炉薄茶ゆかの手前
一 疊半入勝手角炉薄茶夜の手前
一 疊半逆勝手角炉薄茶真の手前
一 疊半逆勝手角炉薄茶小でう手前
大要五ヶ条

茶湯評林巻之四

臺子の習

一 臺子ハ必大書院の餝なり又諸山の寺院なとにも縁かさりにも何色の客なくとも先薄茶を出す故に目通りに荘べし
一 臺子の向にハいつとても臺子屏風をたつべし表面にて何なりとも絵をかくべし色紙短冊をはる事をきらふ又絵の心をも能書の打付書にかする事なる是を表裏なく手の風をかへかくべし
一 屏風立に大幅を指事ハ古の法なくするなり但し左も子細なる貴人の位の為の時ハ大幅を指べし

臺子ハ五徳なし風炉の縁よりも低く能ゆへ炭を
たゞも能故火気強し然ども薄茶ハ数をたつる時ハ
湯さめたがるゆへつぎ煎を立も不調法ゆへ柄杓立まはし
たる長火筋なく火をかきさがし湯をたぎらせく
點るゆへ蓋置よも長火筋を添し能也又火ハ急にも
用ある事をしる由也

一 薄茶碗を計ひとしいふも重子能べし又さこゝろ
茶碗と棗とらハ両組ありて脇ニ計ひ三ツ重子能事
と何れ又茶臺を見も計ひも有べし貴人へ高位ニハ必
臺ニ乗すへまいらすへし茶を點る時ハ先臺を取ニ

給仕人ハおなじく能薄茶をたてゝ其上ニ能給仕の人
をしまくあはせなく持来りよる貴人へ茶碗ハ是を取
脇へ寄臺を能べし貴人へ茶上りかハ臺の上ニ御器
乗るなるを故ニハそく処ニ能べし

一 古風の習ハ臺子ハかゝらかな帛紗と筋違たゝミ
様ニあぐる事何を勝手深是も兼日ハ客ハなくハ定
きまとし又臺子ハ天上ニ釣をも又釣にもかゝ
りてハ方ニ飾おく是を一ツハ習なり

一 臺子ハ風炉ハ客の方ニ能事也又勝手の方ニ能
事もいづれもえ知た物数寄次第也

一臺子の順逆を定るハかへ付の方ニ水翻を置ときハ順
逆の定あり
一臺子ニ四本柱ハ古法にて極りたる事也及臺
子ニ数の柱にて上下ニ雲形を付たるも是
も象棋點極にかなる事なし併風炉釜水指
の大なるハ及臺子にハ宗にて細ハ中ニ柱を
用へ風炉水指を中ニ置故中の柱ニはらふ事なし
なしハ水指の耳も風炉の耳も柱より外ニ出ても
不苦故に内ひろし
一小臺子ハ何も是點極にかなる也又左の翻

風炉釜水指ホとも小なるを用る
一たひ臺子とは下を二段にして風炉ハ宗ゐハ天
上にあり一方ハあけ後脇ハ内なり縁なり水指ハ方
ハ上を小体臺にして下にハ袋を付るにあり
ハ水翻を入中の脇り水指を置上のハ茶碗を
置事も又ひや蓋置を置て下ニ茶碗を
置事を行也此時ハ水翻ハ棒よりなるも又杓
杓立を置くかなる事と行也點極ハ臺子の
おゐかなる事也
一凡臺子にハ濃茶薄茶ともに置の臺ハ此故何か

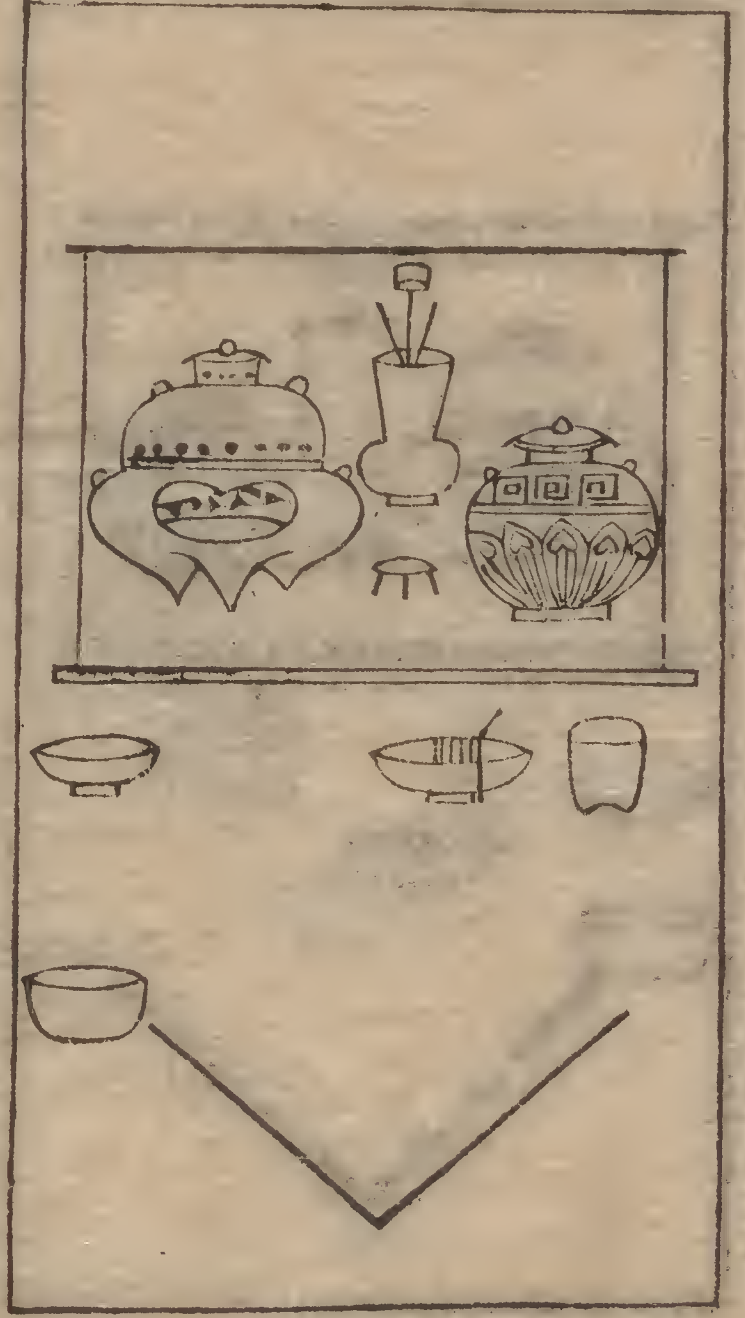
炭斗へ入る寸法流傳集にあるなり常の炭継ほどに割入
火筯羽帚鐶香合釜据出風炉にハ釜を勝手に
方白上炭をためとする勿論下火をかきたてるが吉
ぜハあるとハ炭を重ハ炭おゝくもかゝる物なり釜上ル
時何時も勝手の五徳の足を立る也炭入ちがひなき物を
へるし釜へ細く心を付水をちらすべし蓋子ハ大火故ハ
やく湯へわく由也
一 土器おハなしばけ灰にすべしまはすくひの裏にてはき
まはしならすべし灰をぬくまゞハ大焼臼ハ風炉の時ハ
灰にいろくれならひる

勝手に此臺子中飾之圖

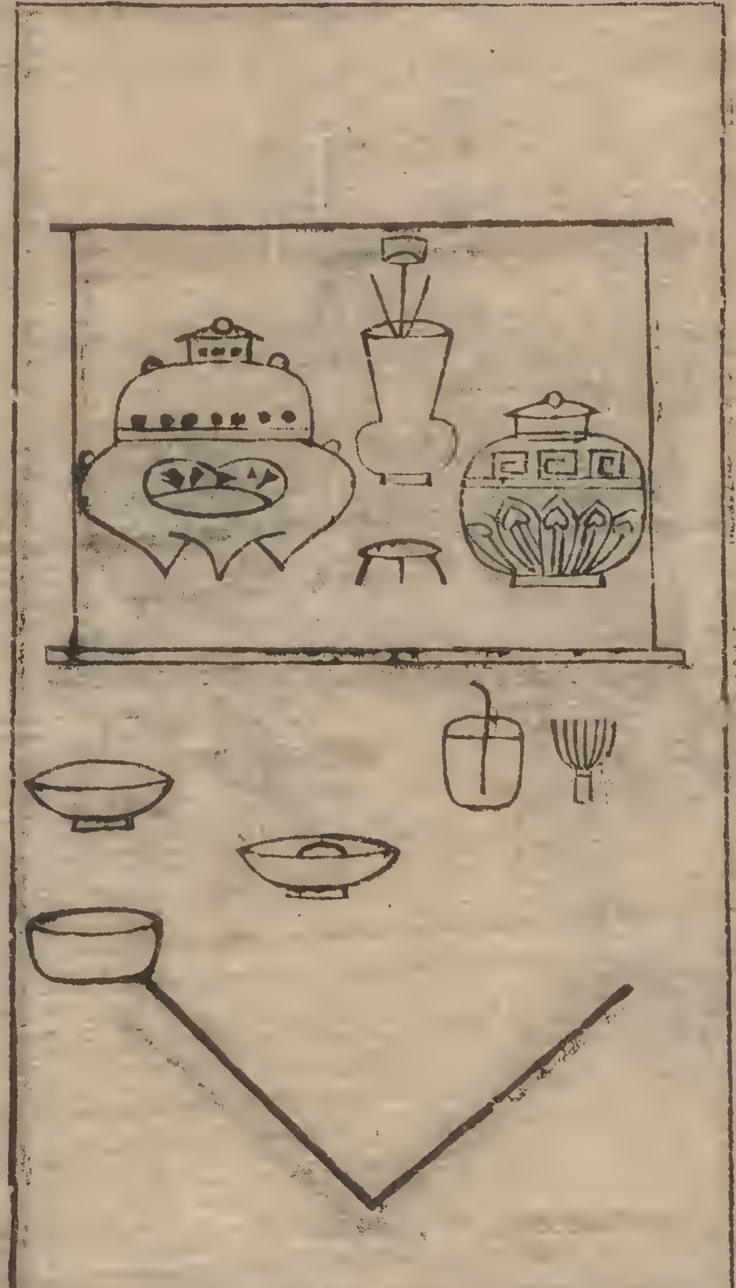
一 奥ハ小さき圖なくハ中飾をあんくなくき此人々圖

一帛腰にはさみ
は勝手臺子點樣は如圖ニ禄ニ居て臺子を去事
一尺二寸左に
手にて水翻
をとりて如圖
左に膝の上
に置手膝ニ
それより茶碗棗を水指の前へ下し又茶碗を
左にて取如圖水こぼしそれより左にて蓋を
取右へ渡し柄杓を左の手にて右にて茶碗を取如

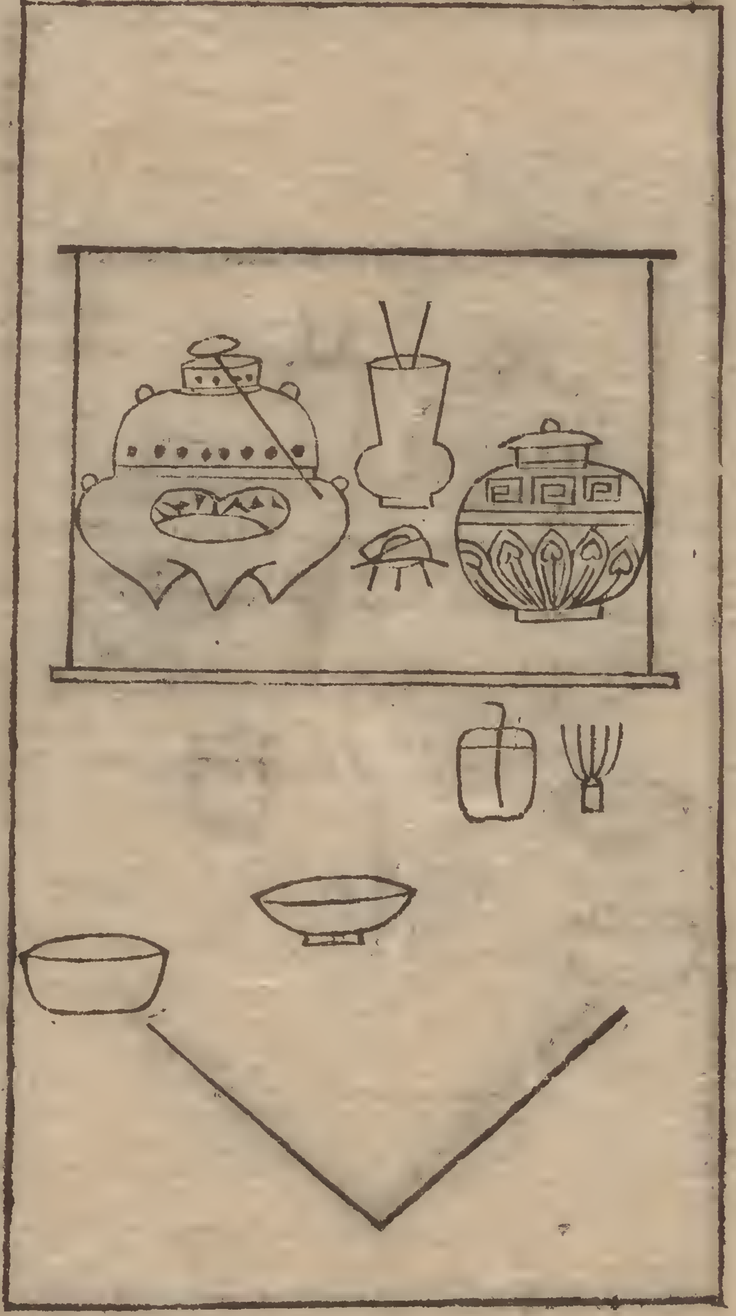
圖蓋をとり是を中を拭ひ如例風炉の脇置合の茶入蓋とり膝なる帛
取出し如常拭ひて左の手に棗を取上中拭ひ如圖
して蓋其如
置べし又帛
払ひ拭ひ折
右の手にて茶杓取
帛にて拭ひ
棗にかけ右
の手にて茶筅を取如圖置べし右の手にて釜の蓋帛を持添取蓋
帛は腰にはさみひしやくをとりひき出し左の手に持添



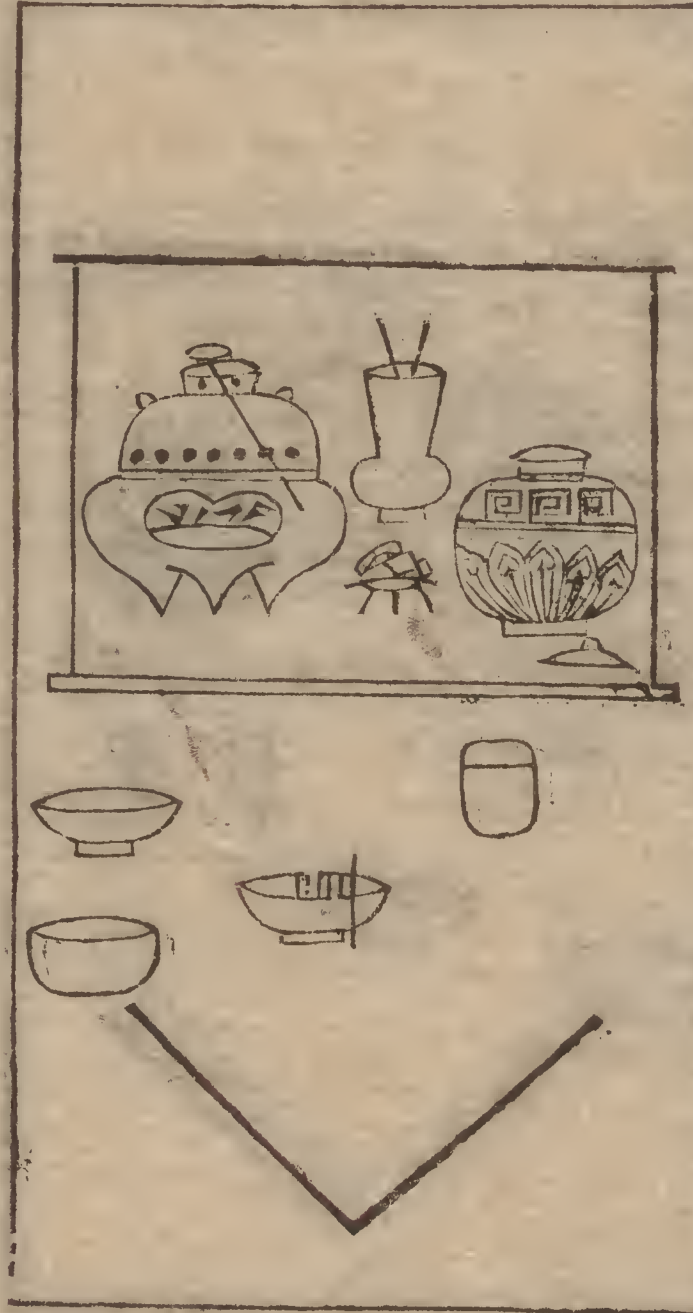
右にて湯をくみ茶碗より前遠くあげそれよりひしやくを右へ
茶筅を取湯次に入てなかにすゝぎ茶巾をたゝみてのせて
右手にて取上
湯捨巾ひと下
に置茶巾にて
さばき茶碗蓋へ
上右の手にて茶杓
を取左の手にて棗を取
蓋を取茶を能ほどすくひ入蓋をして本の所に置茶杓も如本
水指の蓋を取角柄の方より置右の手にて柄杓を取湯を茶碗へ入る



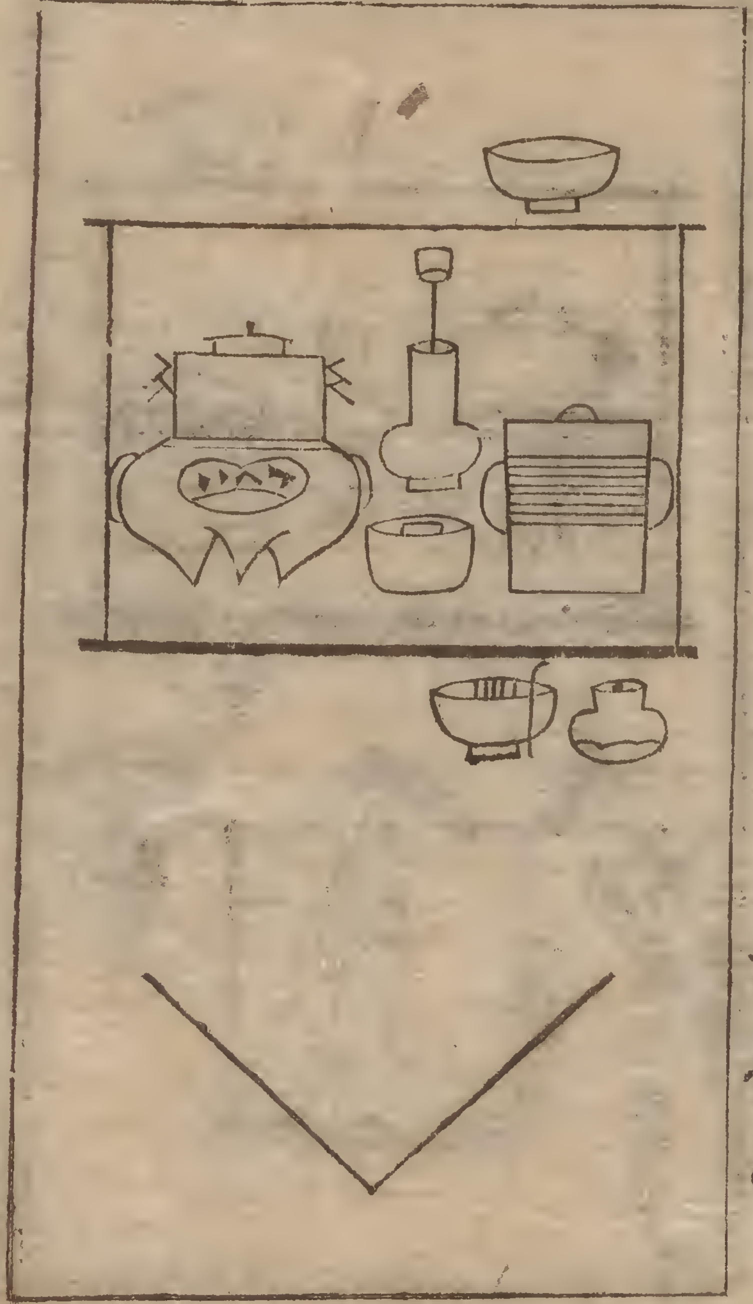
水を能ほどくみ合掛ての茶碗へ入しひしやく茶碗にかけ
此時は引柄杓とて茶筅をはくとふるへし加減右の手にて
茶碗出し置
左の手に建水茶碗
出し又湯を
くみ入右の手にて
上左へ流し
右の手にて茶巾を
湯すゝぎ巾ひと下に置茶巾さばきして茶碗に蓋へ上茶杓を
棗を取茶を能ほど入かきまはして湯を入水をくみ



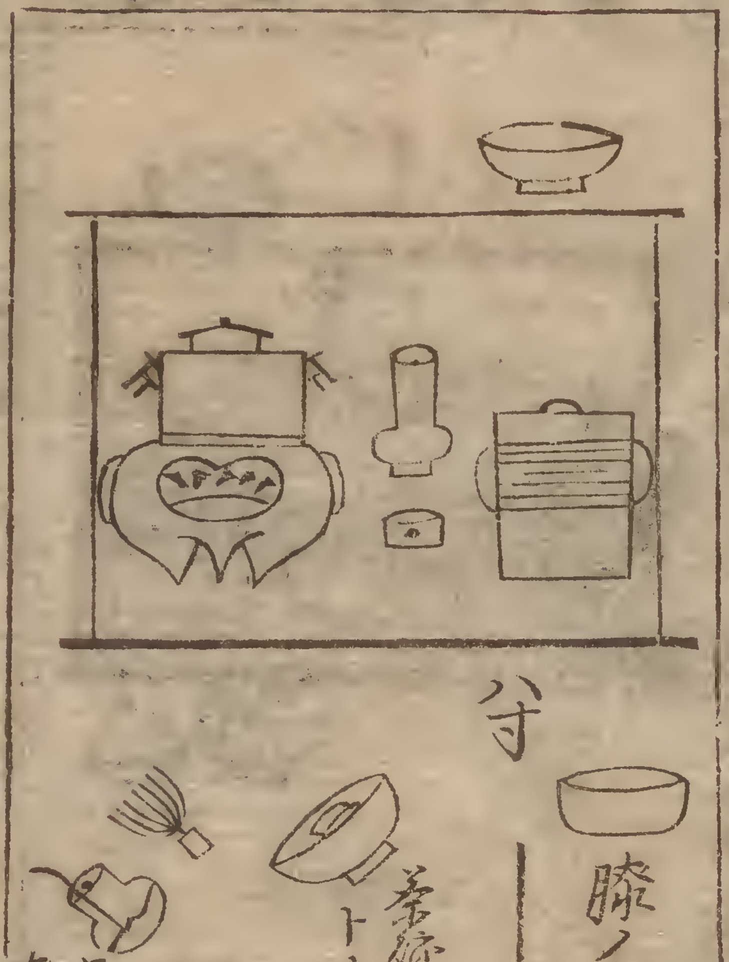
茶筌を取ゆゑ又ふたをあけ茶碗へかへるとひやく取湯を
入て取上すゝぎ茶巾にてふき下に置茶杓を取茶を入又
湯入水をとゞめ
茶筌を取ゆゑ
置はふくさを
出なくして右の
通るは治様も
先は同じまたはおなじ
かゝる事なし治は茶にかゝるひやく又真は物物で
茶は蓋を取と左に二に柄杓立て置べし



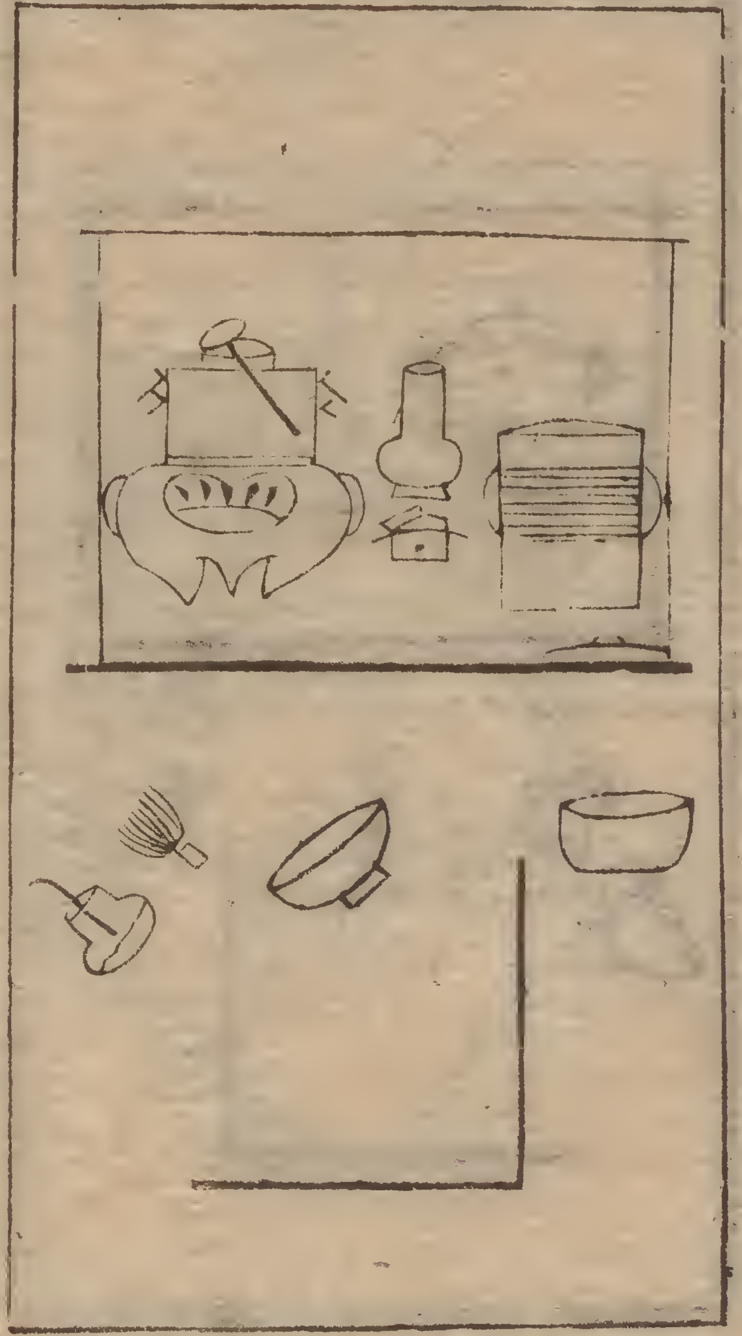
逆勝手踏出の大海飾の茶碗之薄茶
一大海は茶入又茶碗ハ水指のまへにおき飾茶天目よ茶碗より前に置
帛紗にてこれをとりあげ先如常に扱ひて居て水翻を取て右は前
にてさし天目の茶
碗ハ左に置て
いずれもとする如く
置右はひざ台
すゝと云事ハ
寸左ハとも又はすにて居て茶碗を取出し茶子を半ばに置て
茶入を取帛紗にて拂ひ如常置べし帛紗改めて



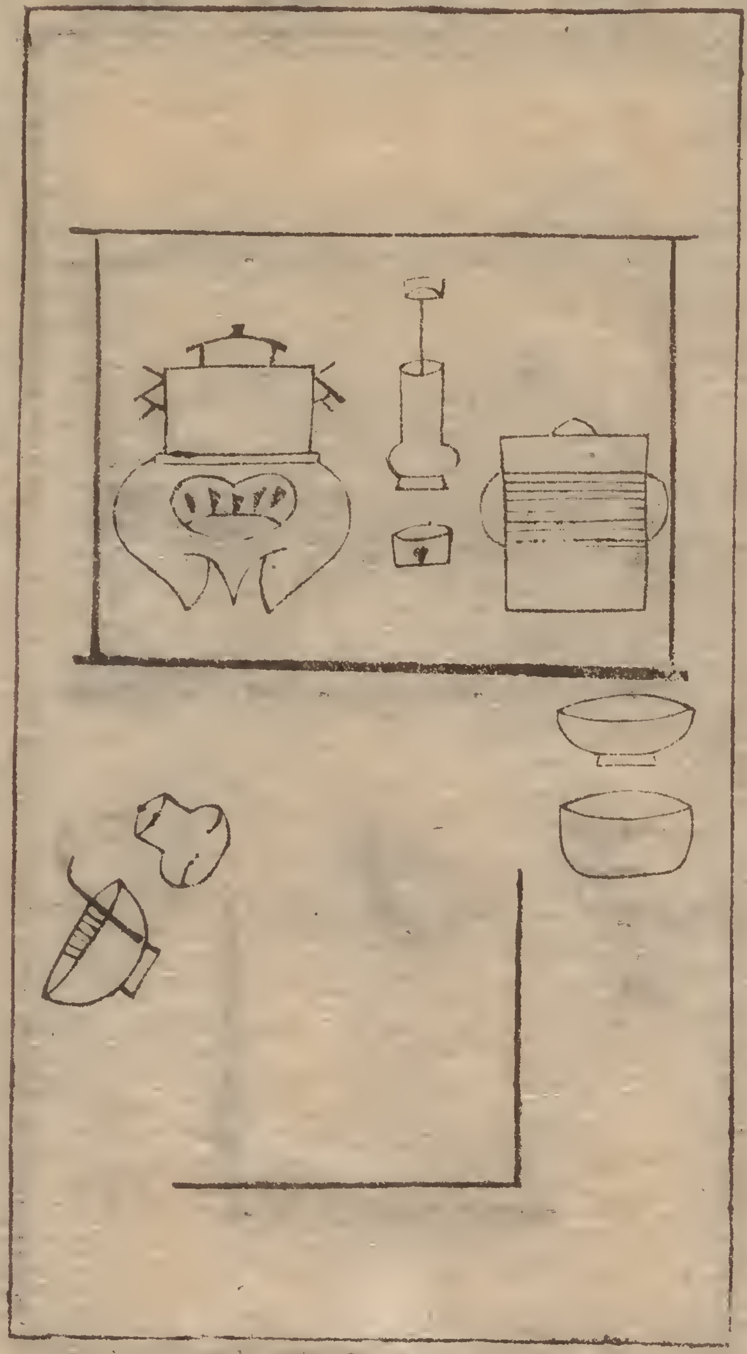
茶杓(サシヤク)取(トリ)ふくさ茶入ニ置はまゝをけし勝手(カツテ)の方ニ置こ
ゝ茶筅(セン)を置く也蓋をかへ茶碗おへり出し茶筅(セン)とならべ
蓋置(フタオキ)を取て柄
杓立(シヤクタテ)のおゝ置
帛紗(フクサ)ゆく釜(カマ)に
蓋(フタ)と取帛紗(フクサ)にて
しめたきを ひ
杓(シヤク)を二度(タン)ゆぬきき
湯(ユ)をくみ釜(カマ)掛(カケ)杓(シヤク)たゝむべし茶筅(セン)置て湯次(トウズ)こゝりて本座(ホンザ)
より釜茶巾(キン)を取茶ほりまゝ茶碗取(トリアケ)上湯を捨(ステ)こゝも



巾ひ下ゆおつき茶巾をとめ茶筅(セン)置此蓋(フタ)の上ゆ置茶杓
取茶入取蓋と取茶台子(タイス)此上ゆおかす茶を納(?)
御(ノモノ)おろさして
水(ミ)おきゆおゆき水
指蓋(サシフタ)取柄杓(ヒシヤク)と取
湯(コキ)をとくゝ
水をひめ合(スヽセ)
うけ茶筅(セン)を取ゆ
取べし茶筅出し茶より仍る茶碗 丸て湯を入
茶巾取湯捨(リユウステ)ゝ茶ゆ巾ひ下ゆ釜茶巾(キン)上(アケ)茶を入

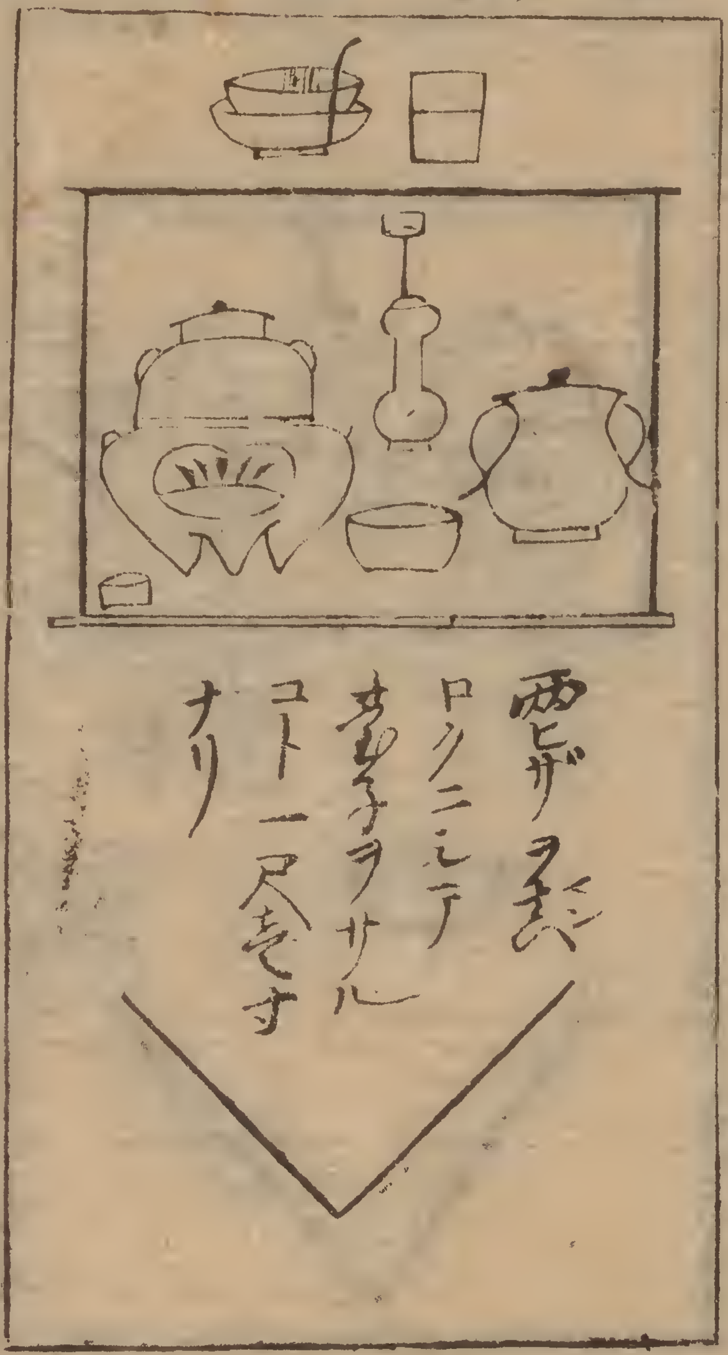


湯を入てをかめ終なり此蓋おすべし土店ハいく
たびもくも火をたきし水指(ミヅサシ)わきくのまゝあらかるへし

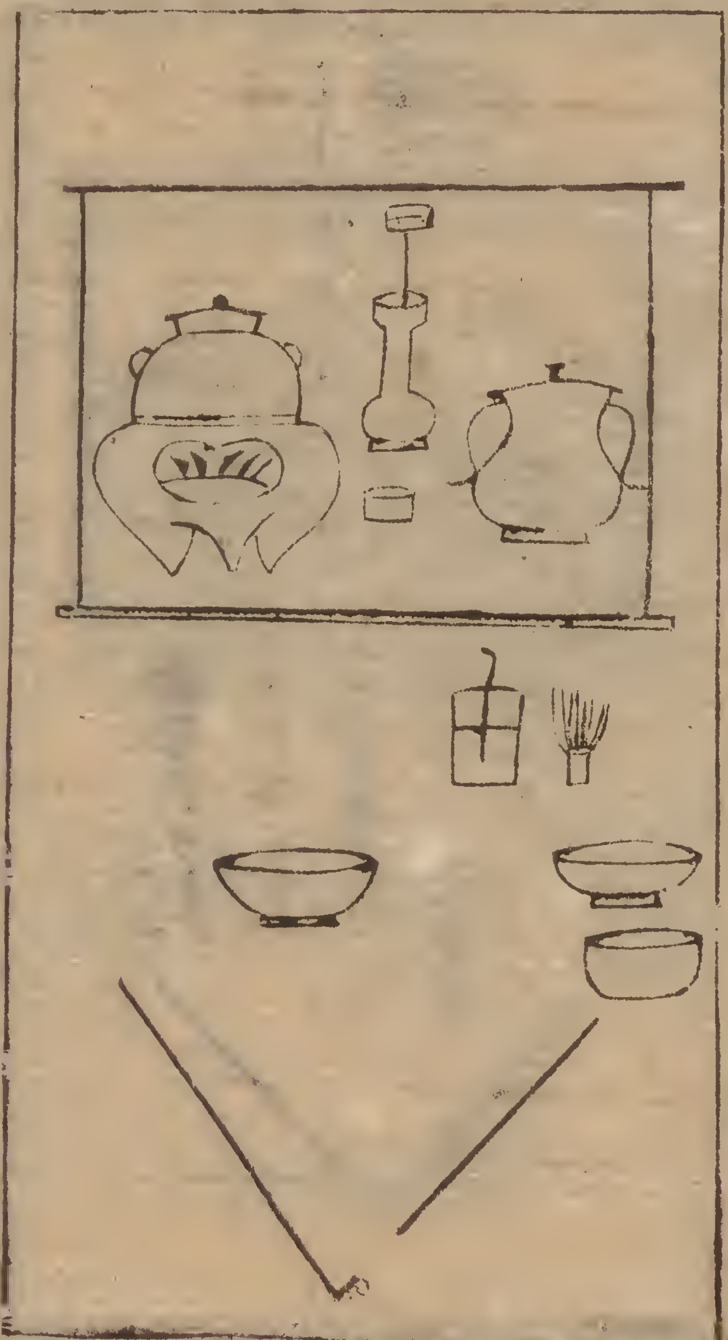


扨し茶碗茶の湯桶(ユヲケ)如此置べし但文天(テン)と云也
べし

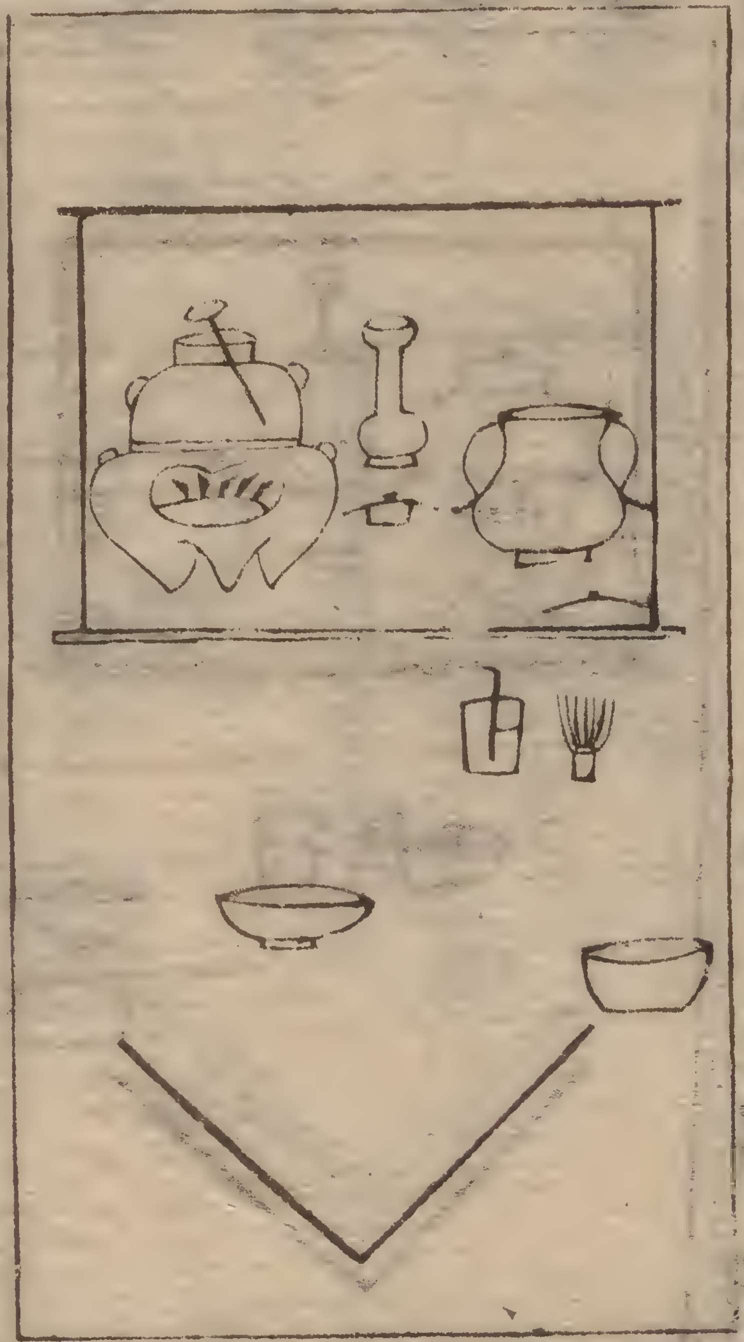
逆勝手(トツカツ)臺子之飾(カザリ)茶
一上は茶入中次(チウツギ)書茶碗(チャワン)に帛(フクサ)膝(ヒザ)よりもたせ先台子(ダイス)のなく茶
碗をドし水指(ミヅサシ)は二ツ(ニツ)置右のかく中次(ナカツギ)並茶碗とならべおき
いずれもして
右のかく水翻(ミツコボシ)を
左膝(ヒザ)の上に置
蓋置(フタオキ)を並て
柄杓立のかま
置かのかく茶碗を手(カリ)かり如圖置向(ムカウ)北方茶碗
此縁(フチ)よりなかの左(ココ)右のかく中次を並ひざ此ども中あり



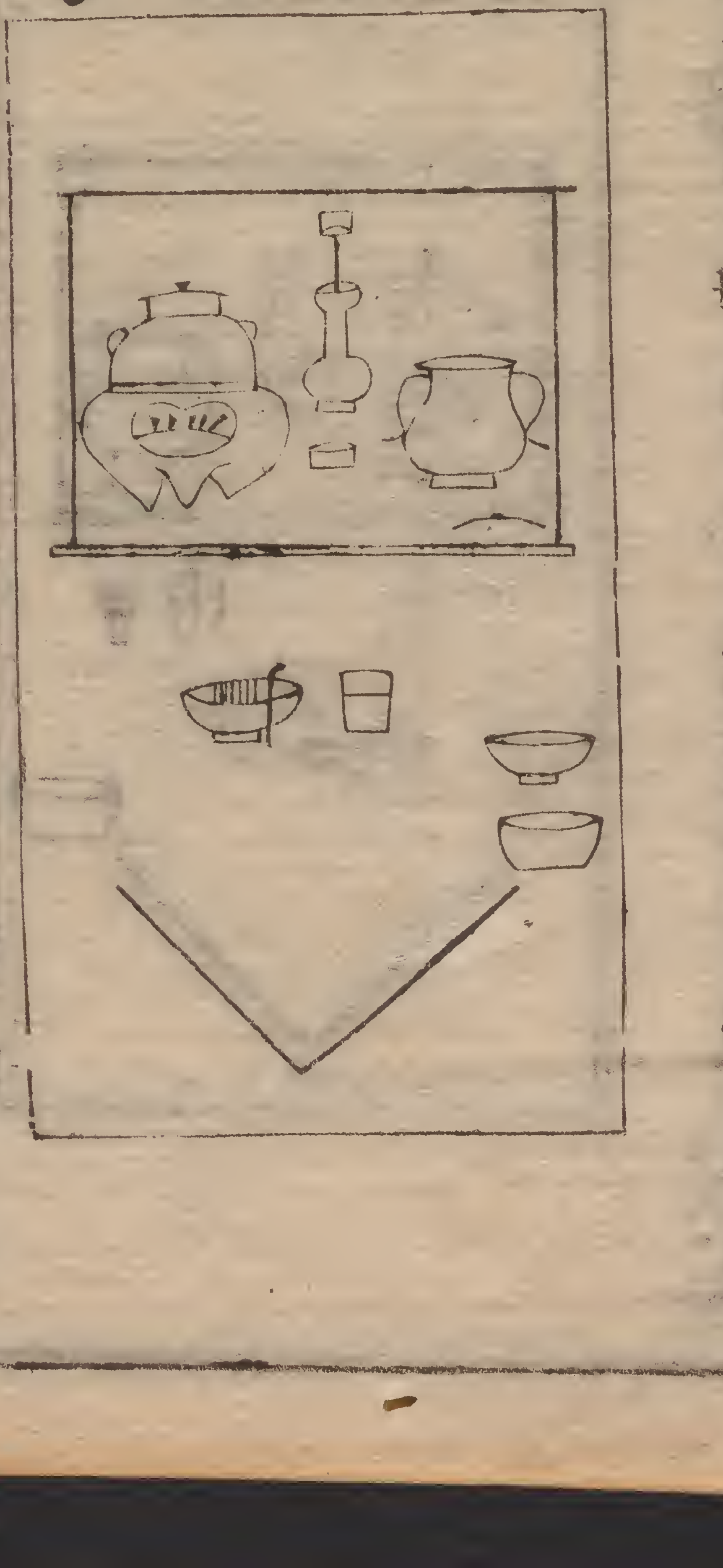
ふくさ帛はさきして左の手へ取と巾ひ前のごとく茶入を
又帛にてふたの紐のあたり拭右の手にて茶杓を拭ひ中次のうけ
茶入を取て如
前のごとく上へ置
茶碗右の手にて
こぼしの上にて
釜帛の手にて釜
の蓋を取帛腰
ちりちりと柄杓を取てよぬき湯をくみ茶せんのひたして又
かきて茶せんを取あげとしていと釜のところへ置



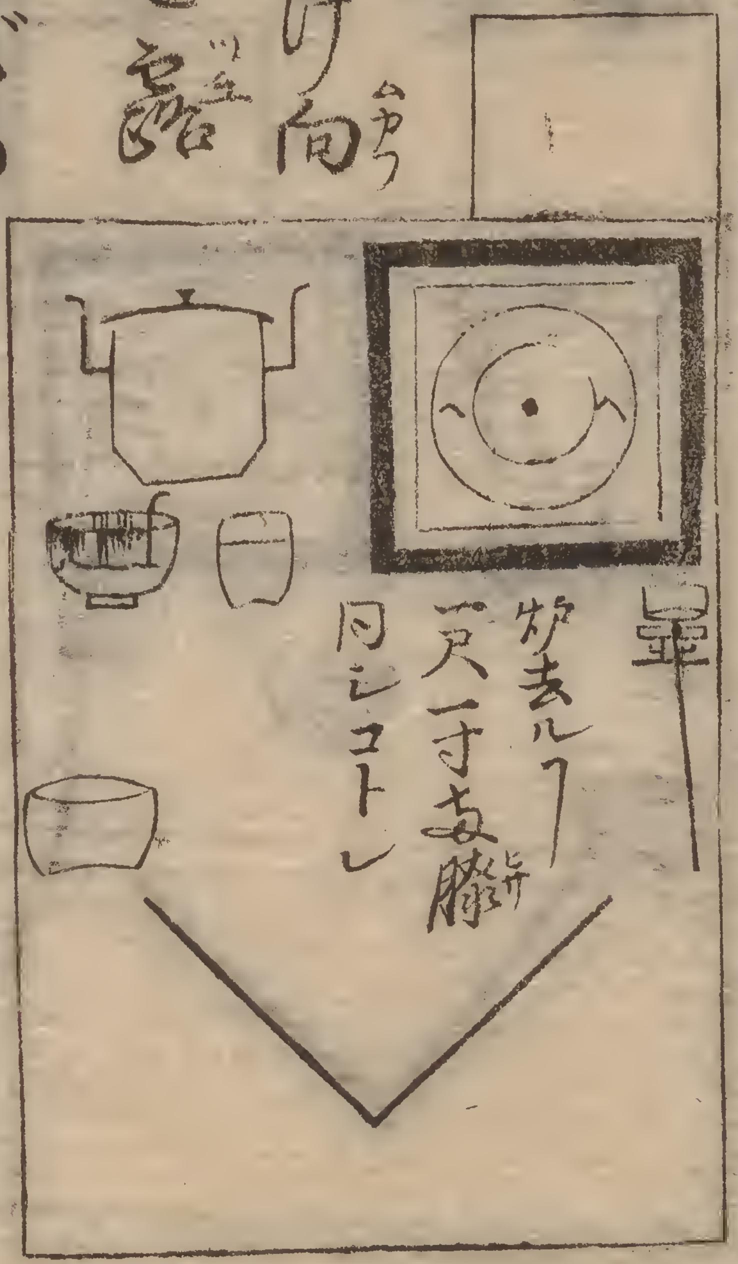
茶巾を取さばきて茶碗拭上湯捨三度ふくみ
巾を下にかさね茶巾さばきして釜の蓋へ上茶杓を
中次を取蓋をとれ
是に習あり
中次はぬきさき
ありすべし茶
を能振入
蓋をしておく
さて建水指の蓋を取湯をくみ水をそゝぎ合柄杓
かへる是は柄杓を茶碗を取右の手に置かし又茶碗を取湯



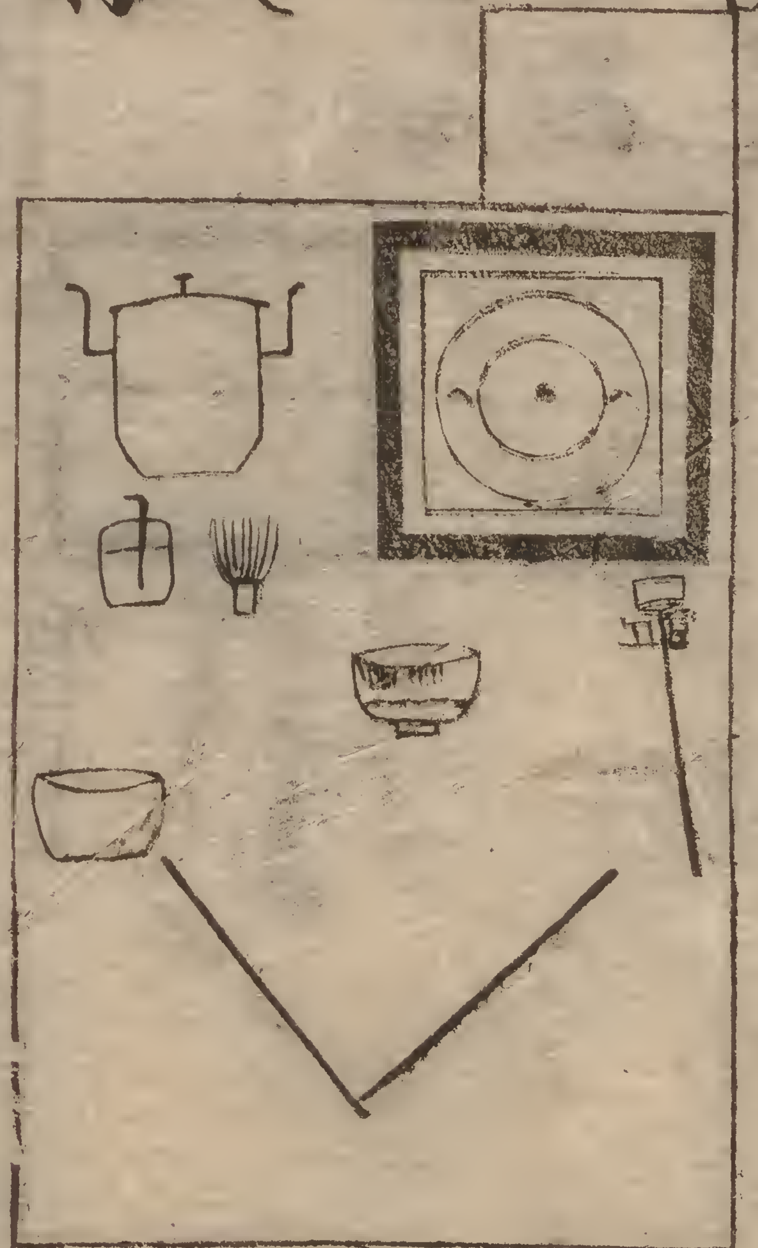
汲茶碗よ入茶巾ゐ湯を捨中ゐ茶を入湯へ水をゐ蓋を
取始るかぎらくたなびを加ゑし治め又茶碗すゝぎ又
水翻の上ニ置
何もの茶碗し
左ニ治める
水指の蓋を取
水をかへ此上ニ置
茶碗を左へ上へかけてへ又茶碗かさね上中置て
らへかけ水をこぼし取持てへ立し又持出して炉ニ入
きへ進し水翻ひやかのおとま置べし



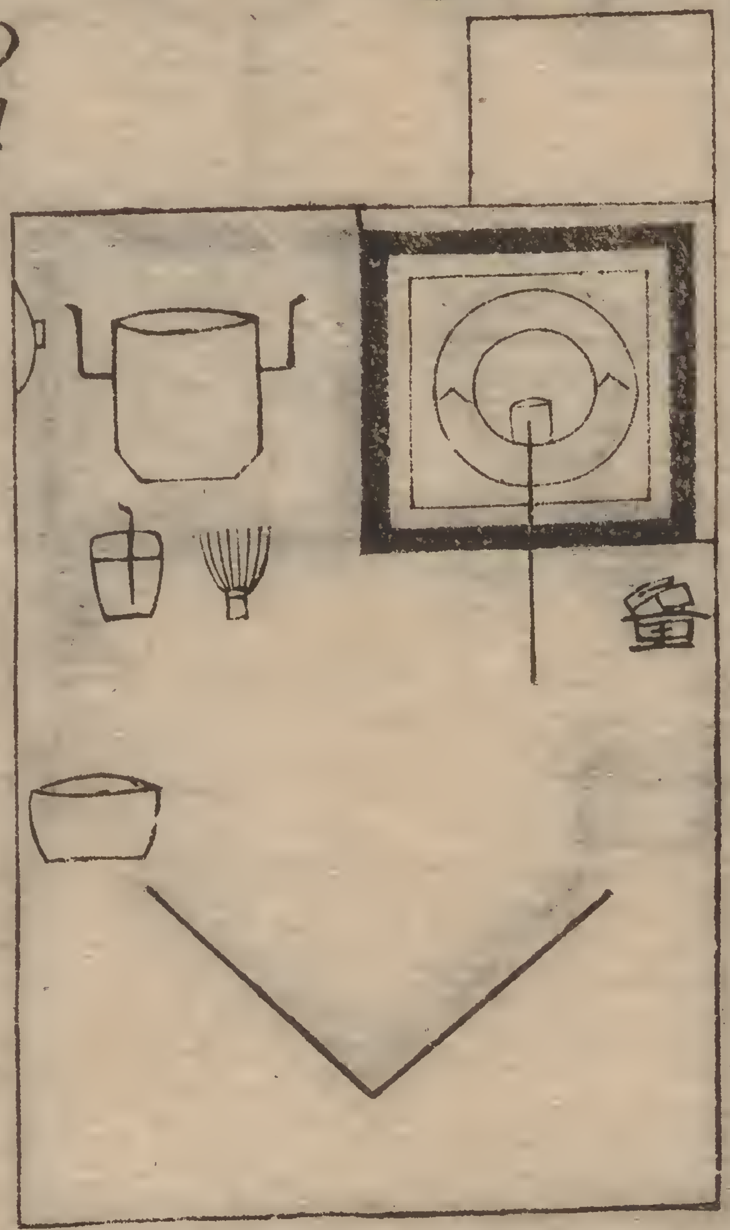
一四畳半ニ揚手出炉左此ニ茶を手お
一水指左にせん棗をおく八茶三具をかざりして水翻ニ蓋置
柄杓へ右なる手に持おひざより左の手ニとくひや
取右にとく蓋置
取出し如常を
のへ左ぎ八のけ向
八斧此蓋を置て露
の炉縁にかけざる
柄置べしひやくをかける柄杓を左へ左ぎ八まつくのけ
いずれひをする茶筅左にとく茶碗取炉縁の左中



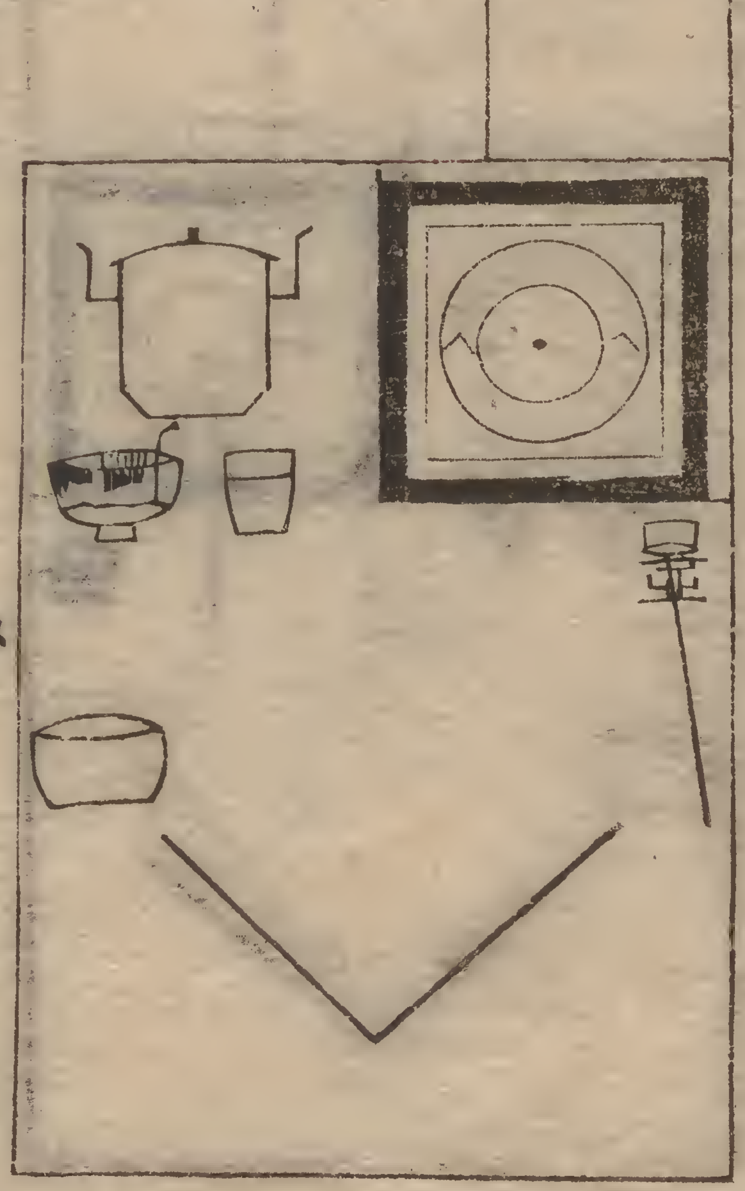
通向ハ一メの臺帛を出し茶碗して棗を上にをきせ
て茶杓を炉縁の通水指の前とあつめ火箸又帛を
らべ茶杓と巾ハ
棗の上に蓋置茶筅を
置のべひしやくを
置帛と札の釜を
此蓋と置帛揃
引きさし茶巾置
茶碗蓋此上へ上ゆをくみて茶碗に入ひしやく茶巾にむ
けかけさへ直りかくべしちやせんとをし三つ



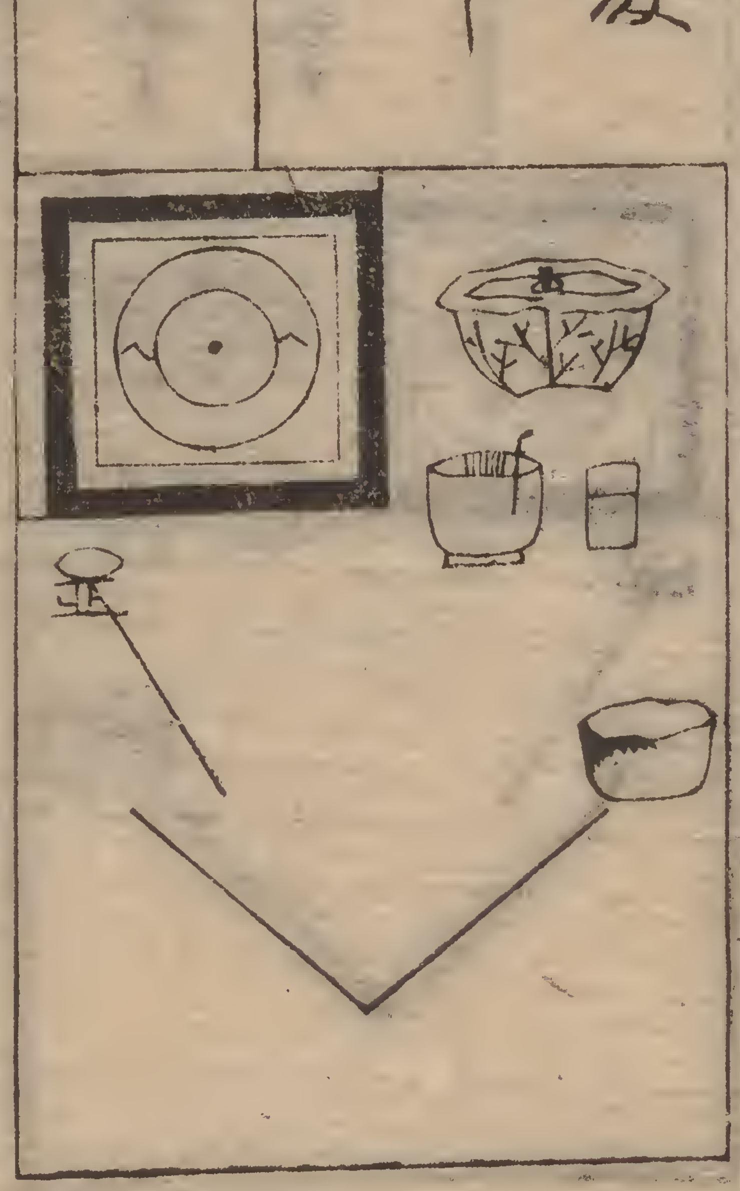
まく得げ茶巾置まへ茶碗乳湯をくみ三つ本ハし
巾ひト水をかへ茶巾まつるか
茶杓置棗を置剣蓋置
まくふる置茶碗
ほどより入棗茶
杓如常遣し
水指ハ蓋置如常
かべ水指せりけ柄杓
置湯を汲よき程ど水入水を汲かむめ合加減ハ釜へ
入ひしやくかけ茶筅置埒るべし然して薄茶ハよく埒る



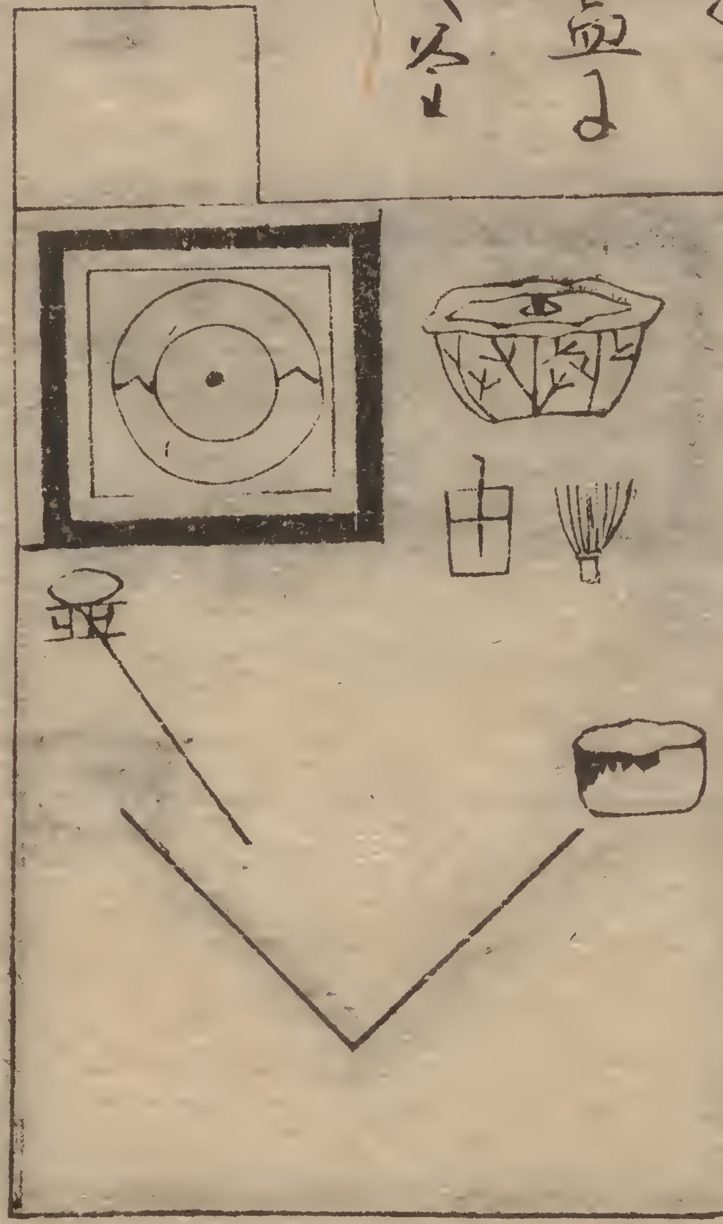
一を嫌とする又きらはぬならひ好みにしたかふ水にても
茶をも絶たぎりたる湯を茶碗に入申さぬを好むべし
然る時ハ好にまかせ
さましなどもまた
茶ように候也
又點前人によりて宜
べし上手は薄茶たく
たる茶ハかくべけれあるを碗と茶碗筒のごとく出し常に
とかく性し細く巾ひろき茶巾ハ志ぼりて強し致す
茶碗にしるるならしめく志ぼるべし

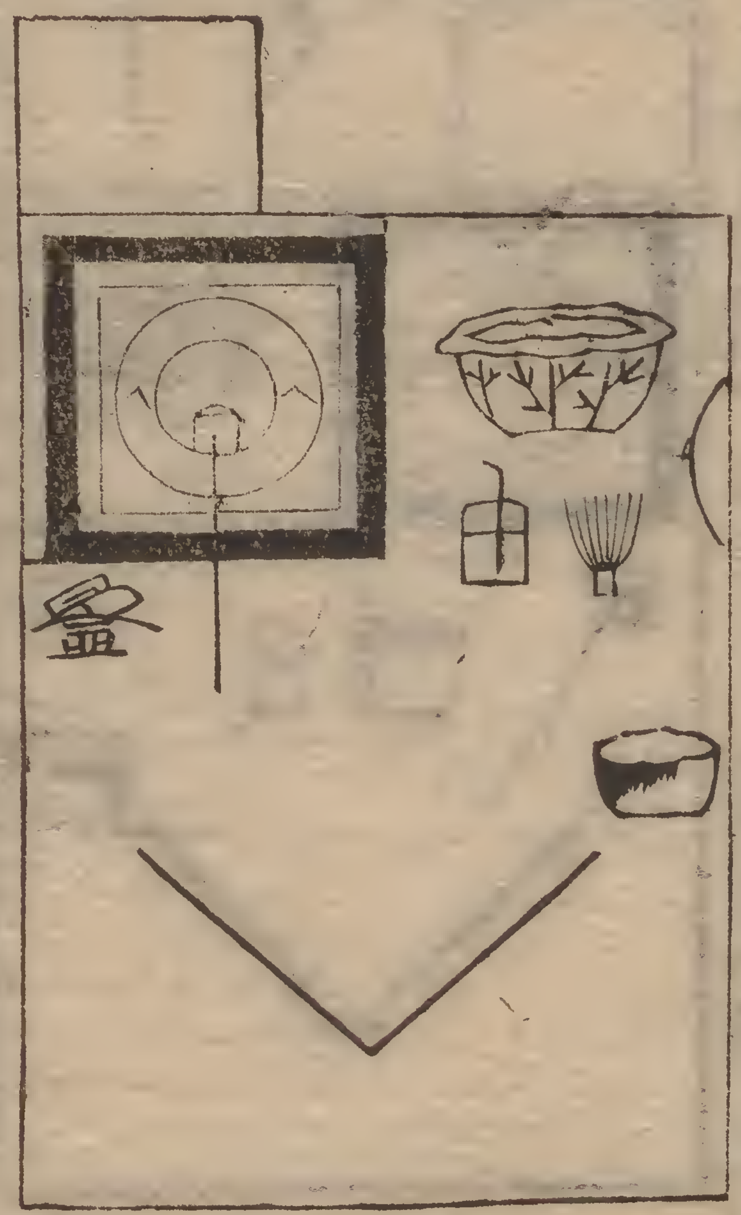


一點半迄揚手出炉にハ此薄茶よろし
一水指蓮の葉なりを用次に水翻并蓋おきひしやくけ右のごとく
持出所によきにおきて居する炉縁をさる事尺をすへし
其の中にひしやく置
左の手に蓋置置べし
湯のごとく其目と
記のけ向ハ釜
の蓋炉縁によりて
ちかる御りよりおき物を如當おき茶碗を炉縁通向をさん
其を中次をおきおき帛紗をおしはさき又上中ひ如常炉縁



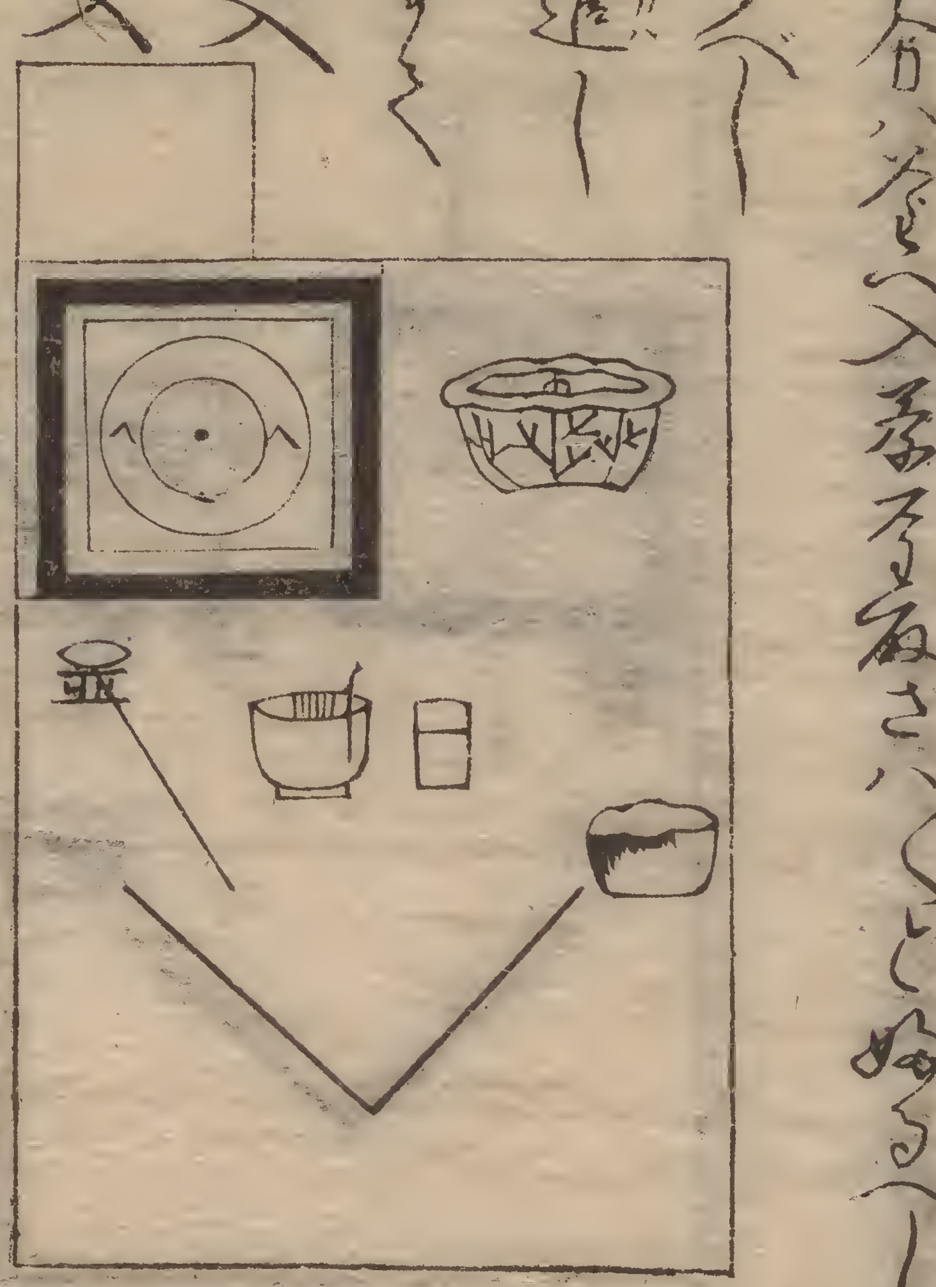
通水指まへを左へ割蓋帛ちらひ納め打茶杓より
巾ひらけ茶筌を取あらくべ拭杓を左よ持せ帛をく蓋はふ
たゝみをけ帛腰よ
さて茶巾を蓋よ
釜湯を汲入ひやく釜
へかけ茶筌を湯
洗しらへて上台
へ遣し茶巾れ
去がりたるき茶碗れ上湯をすくひ巾ひ下毎蓋茶巾
れ上さてめ釜の蓋此さるよあわき茶杓を本注を蓋をれ



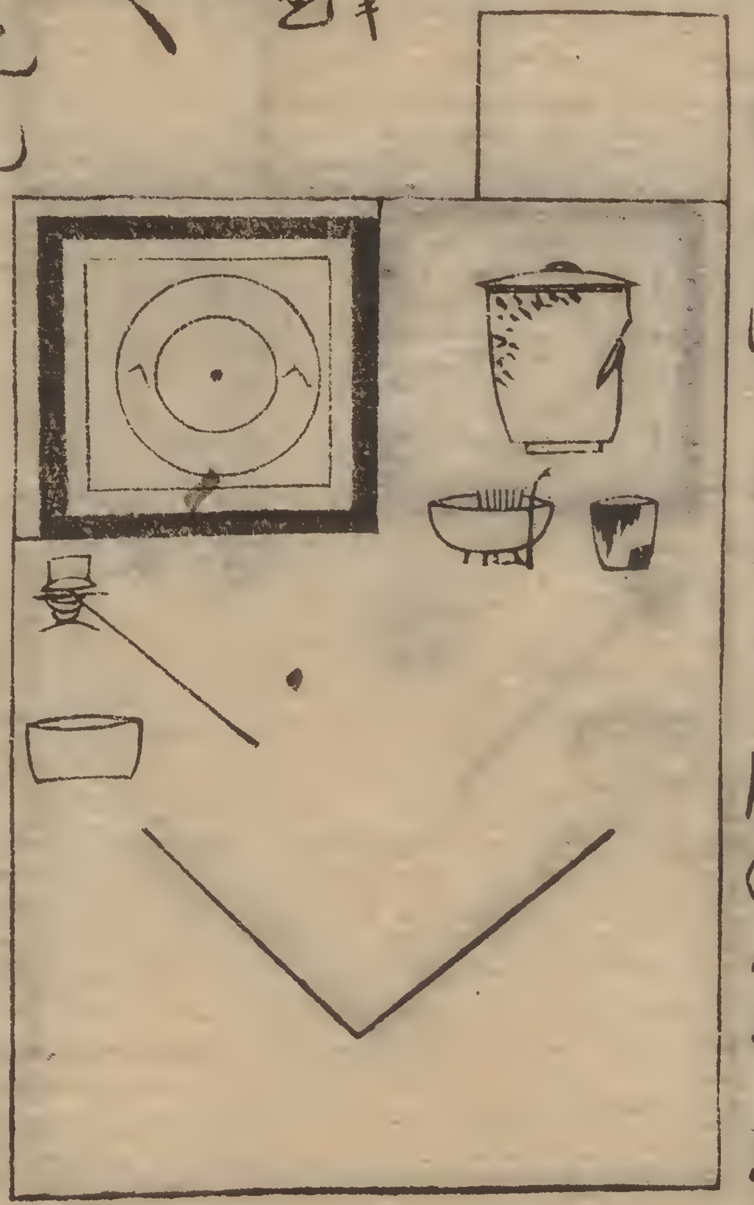


茶碗浸まりへ手水ぶこしてかけ上遣し茶杓
うけ水指のふた蓋をわけかきひやくれ湯を入水か
なくへひあ茶筌をけ茶筌を取ばいくとあり茶巾本注へ遣し
右のくよりおへあるべし何がくも吹くれどもし

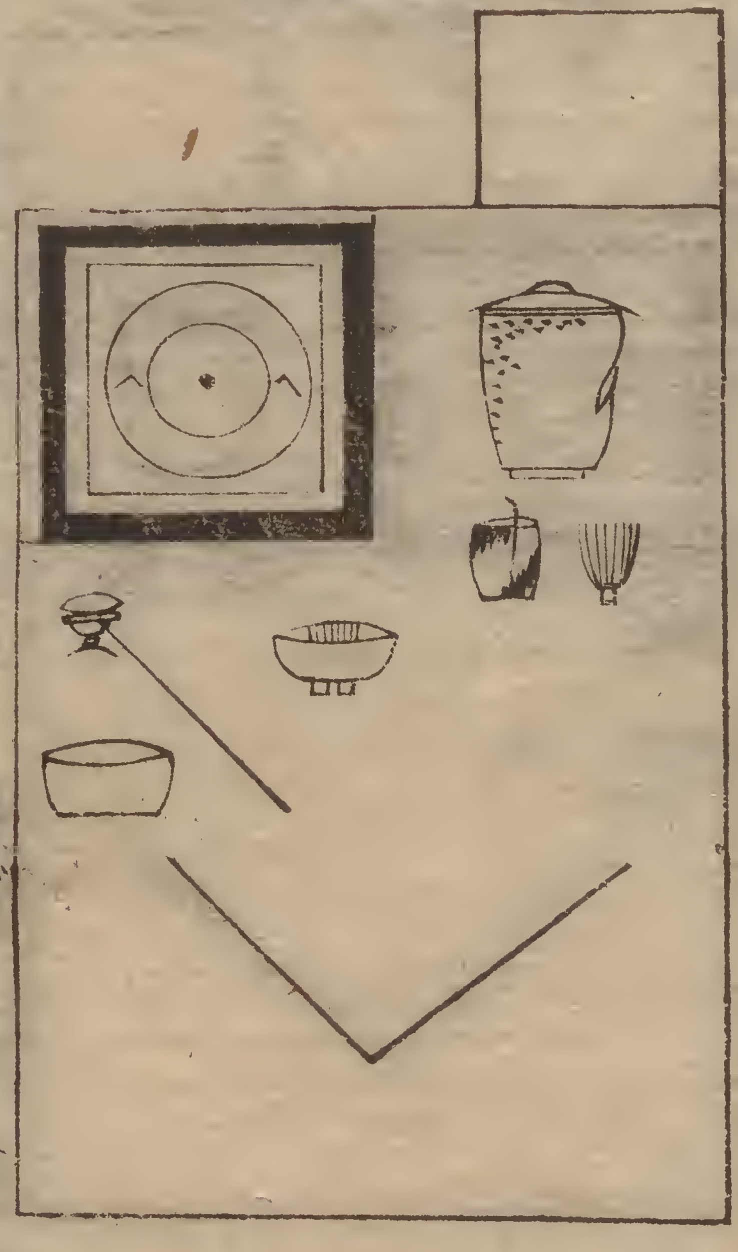
一 温め茶碗ゆるき湯を入すゝぎ捨又湯を入水一ツ入て
半分ハ茶碗半分ハ釜へ入茶碗ハくゝと始るべし跡ニ
湯次を置べし
茶筌右へ蓋へ置べし
茶碗を湯にてすゝぐ
茶巾を茶碗へ入
茶筅を茶碗に入
茶杓を一ツひ帛紗にてふき又蓋をふきて茶碗よりけ中次
と同じくかへいれて水を茶碗に納め茶の蓋をあ
る柄杓にて水にて蓋をすゝし掛けてへ入てよし



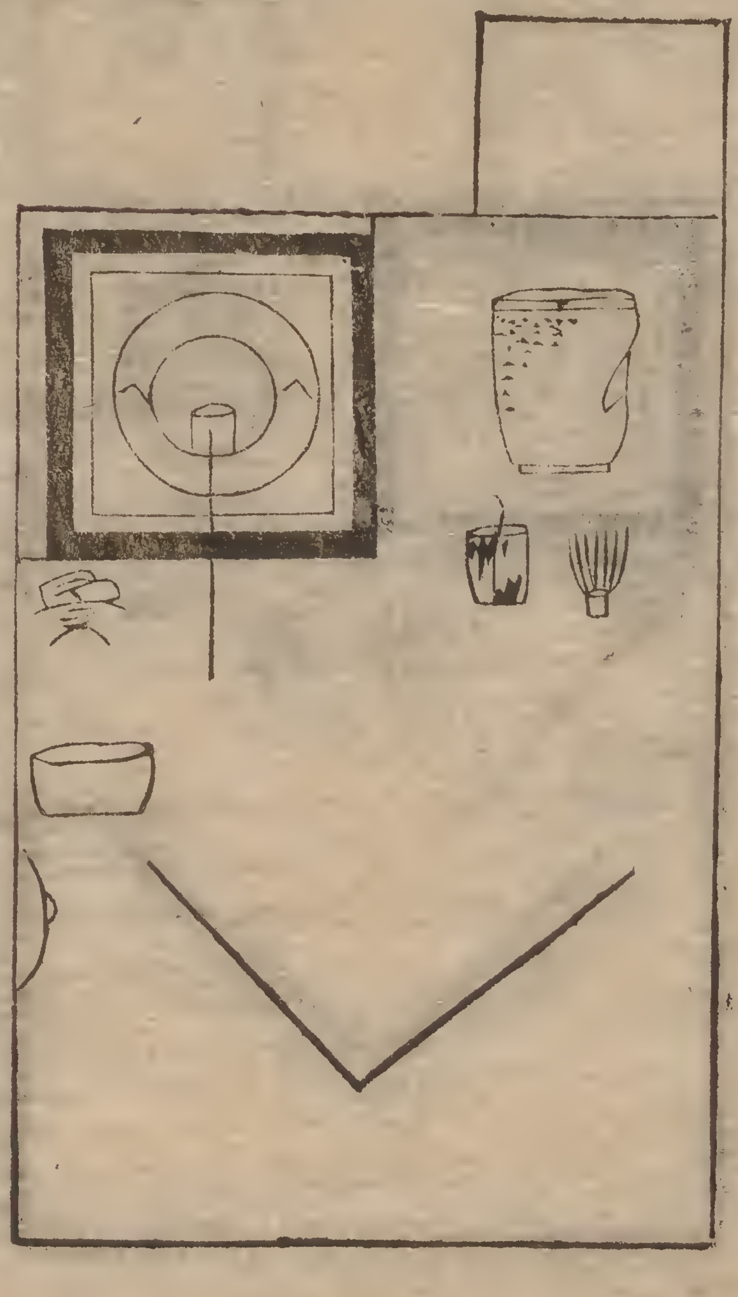
一 手半に柄杓手に角炉にて茶をお
一 こぼし水指蓋茶碗頭切して水をほし蓋置ひきて
入左の手に掛出し下の手をいたせ膝の上にのせ置べし
炉を支茶筅一
尺をすえ左の手にて柄杓
杓を右の手に蓋置
を炭道具をひきて
うけ左の手に茶碗を
右の手に頭切を取およそ帛紗にてふきて
頭切を取あけひもの炉縁通り置べし帛紗へ



つゝおき茶杓(シヤク)を巾にてすゝ切(スキリ)に茶筅(セン)を取すへ右のごとく
ひしやくにたゝみ帛紗(フクサ)にて釜(カマ)の蓋(フタ)をとりおきて
おき帛紗は腰にさし茶巾(キン)を取て茶碗の内へ置上(アゲ)杓に湯(ユ)を汲茶碗
に入ひしやくは茶筅を取湯通(トウジ)三つして本座(ホンザ)へ遣(ツカハ)し茶巾
にてふき茶碗に湯を捨(ステ)こぼしよりすゝぎ(ヌグ)ひて

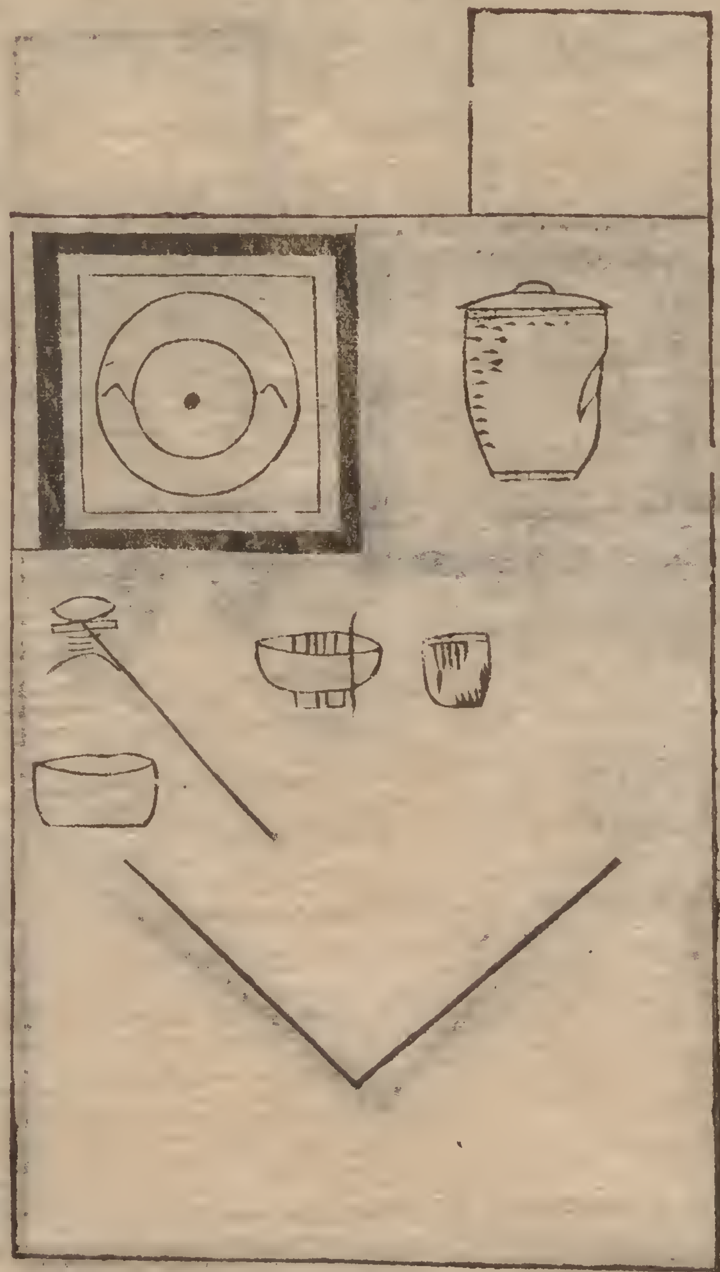


とりてひしやく茶巾をすゝぎして茶入の蓋(フタ)を向けて茶
杓(シヤク)を取すゝ切(スキリ)して右の手にてひしやくの柄(ユ)をとり茶の様(ヨキ)ほどよ
入すゝ切(スギリ)の蓋して本の座へ遣(ツカハ)し茶杓(シヤク)うけ水指(サシ)の蓋を水翻(コボシ)
のとなりに置たくべし然れどもこれは皆ひしやく水翻(コボシ)



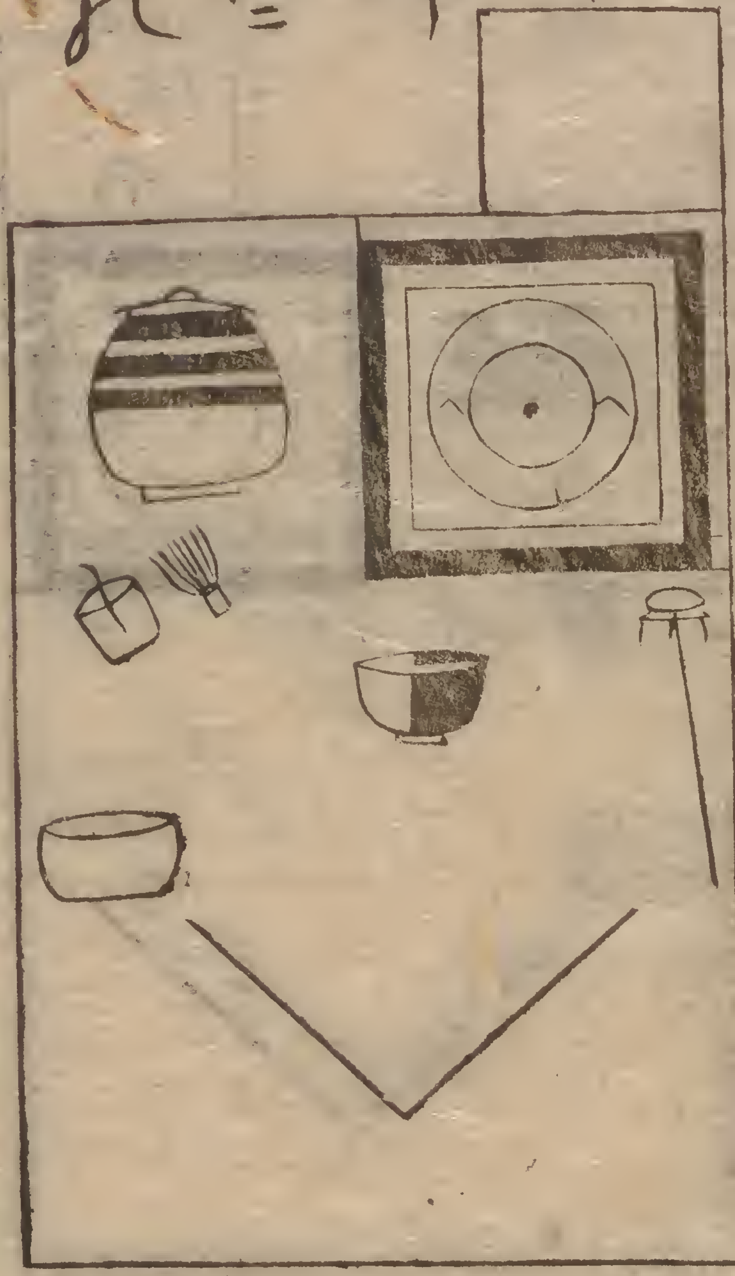
さて瓶の上へおく八寸の所にかゝる迄ためて上にかく
角炉更へ水覆蓋おくなり相をとりて置どもし水指なくとも請

一 釜あり候時は此方にひあり候様にして置べき事なし茶
碗八居り合せ釜の切を取ておへり付おく也



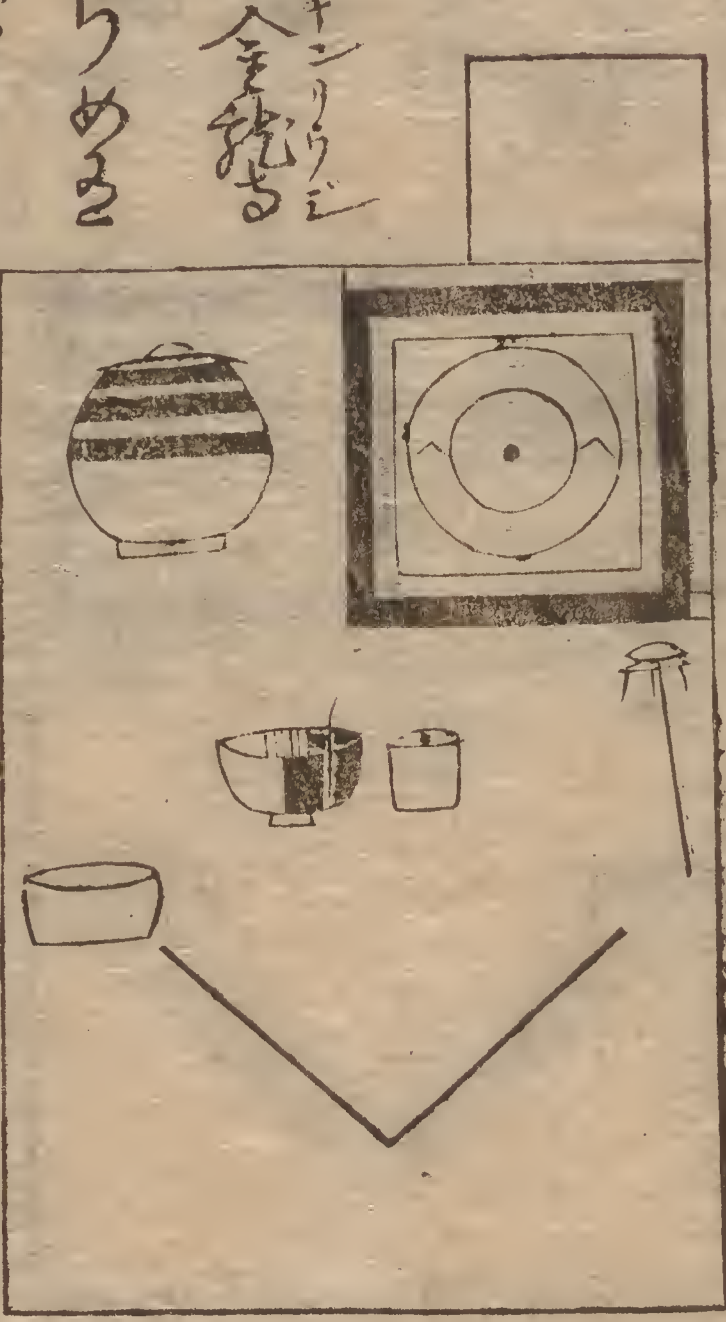
一 手前半に出炉起れば右の方に薄茶
一 葉茶壺かざり候は水指織部形の切形方替の節に焼茶碗
也左の方に水覆を揃おき釜炉より左の方に寄せ一尺一寸の間に居
くづして左の方へ
茶碗取出し
こし取る事也
はづしさして切を
取上より上にあきを巾ひ
水指の上中より茶巾を釜あたりを持ちく切を置べし
事なし入れつより茶杓を巾に仕切めおさき茶筅を入れく

当の指のまへより筋違(スヂカヘ)におき帛紗よりそこに茶巾を
さばきたゝみさして又茶碗に入蓋置(フタオキ)をゝく右目(メ)録のけ
向炉(ムカフロ)縁(フチ)ハ露(ツユ)也
かゝらざるほど
又置帛紗を出し
釜(カマ)の蓋を帛紗に握(コニ)
それより茶巾釜(カマ)に也
蓋の上にて置ひしやれ
湯(ユ)を入ひしやく釜にうけ茶碗を湯次(トウジ)にして左(ザ)手に蓋
茶碗を茶巾を湯(ユ)捨(ステ)に(ニハ)取りと中ひそこを巾ひ



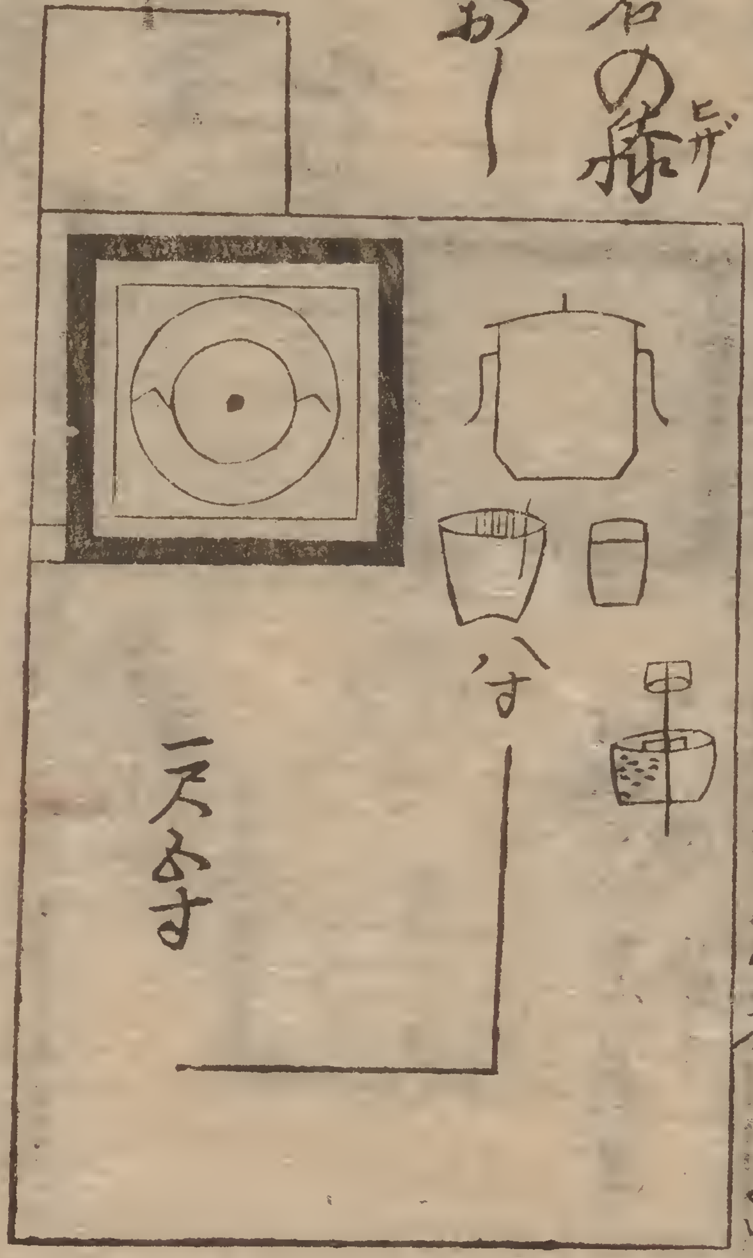
置茶巾たゝみ釜の蓋によけ茶杓を切れかき
をひしやく柄(エ)に持せうけ茶を能ほどに入切(スギリ)切れ蓋(フタ)ヲ
して左脇へ遣(ヤハ)し
茶杓をおき水
さし蓋を茶筅
持(モタ)せうけひしやくれ
湯を入水かゝしめ合(アハセ)
柄杓ハ釜よりうけ茶碗
なく能々茶筅かふべし何(ナニ)にても点(タツ)る時(トキ)も湯(ユ)すくき
して茶巾あく中ひ茶碗点(タツ)るとかゝるとる事あらし

間々に茶巾をしぼるべし 仕付に仕様ありて通るあると
記するに及ず

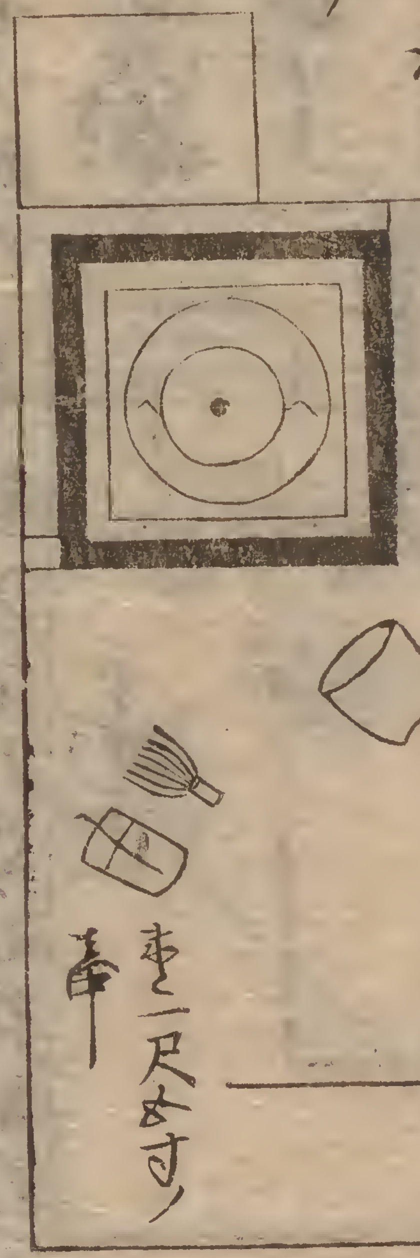


一 数寄切に三つ形の金龍寺
形古作にてからめるを
利休形織部形あるくを 利休形は八ふる中にかざりと向きと
織部形は八中につまらざる也 ま八唐木れ無地を又ゆるまる
何にても有へし

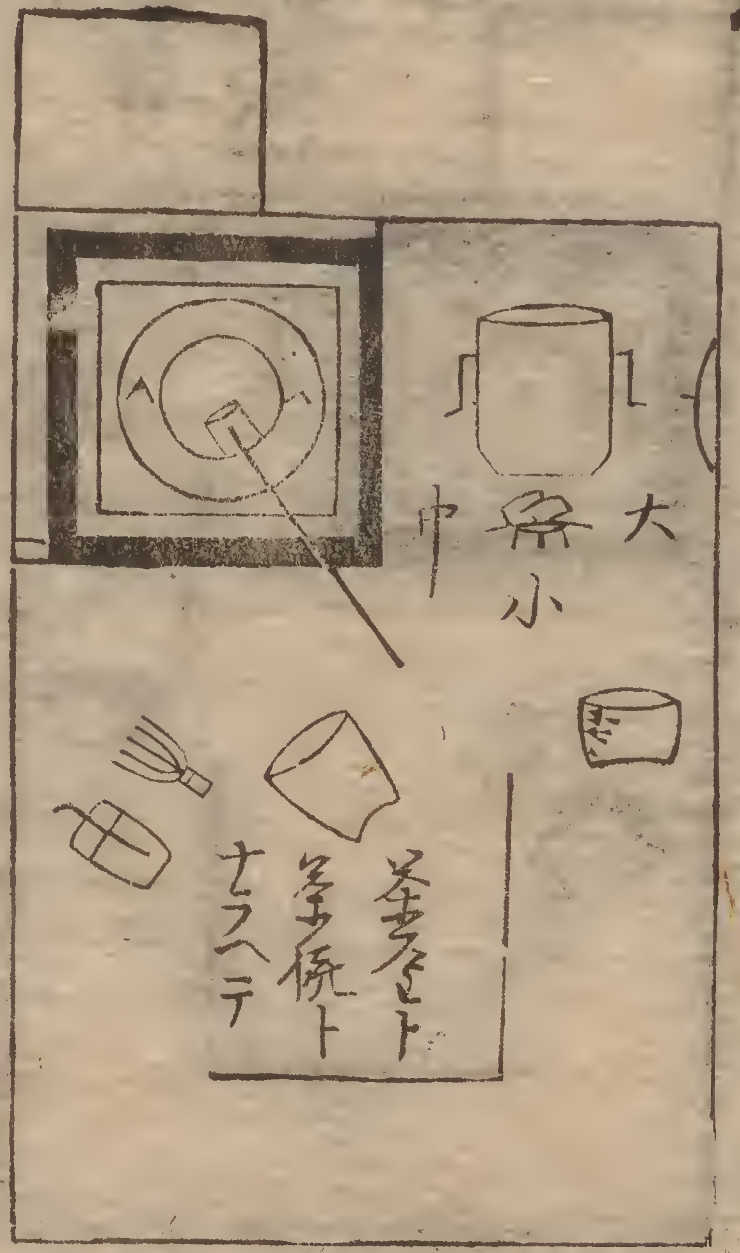
一 あく半透捻手出炉にかくして手お
一 伊賀焼耳付黒ぬり蓋のとらは上座に茶碗備前焼
水翻し 水こぼり 柄杓蓋置入右は手に持かかへ柄杓
居置いとよる右の縁
炉縁通くとんとおし
八寸左のひざ八
炉縁よりも尺寸
あまり八目は中
茶碗を置炉縁通一目此ケ所に置をおかり畳を置
出しはたらさして右の縁たるに置上げるへを釜は摂



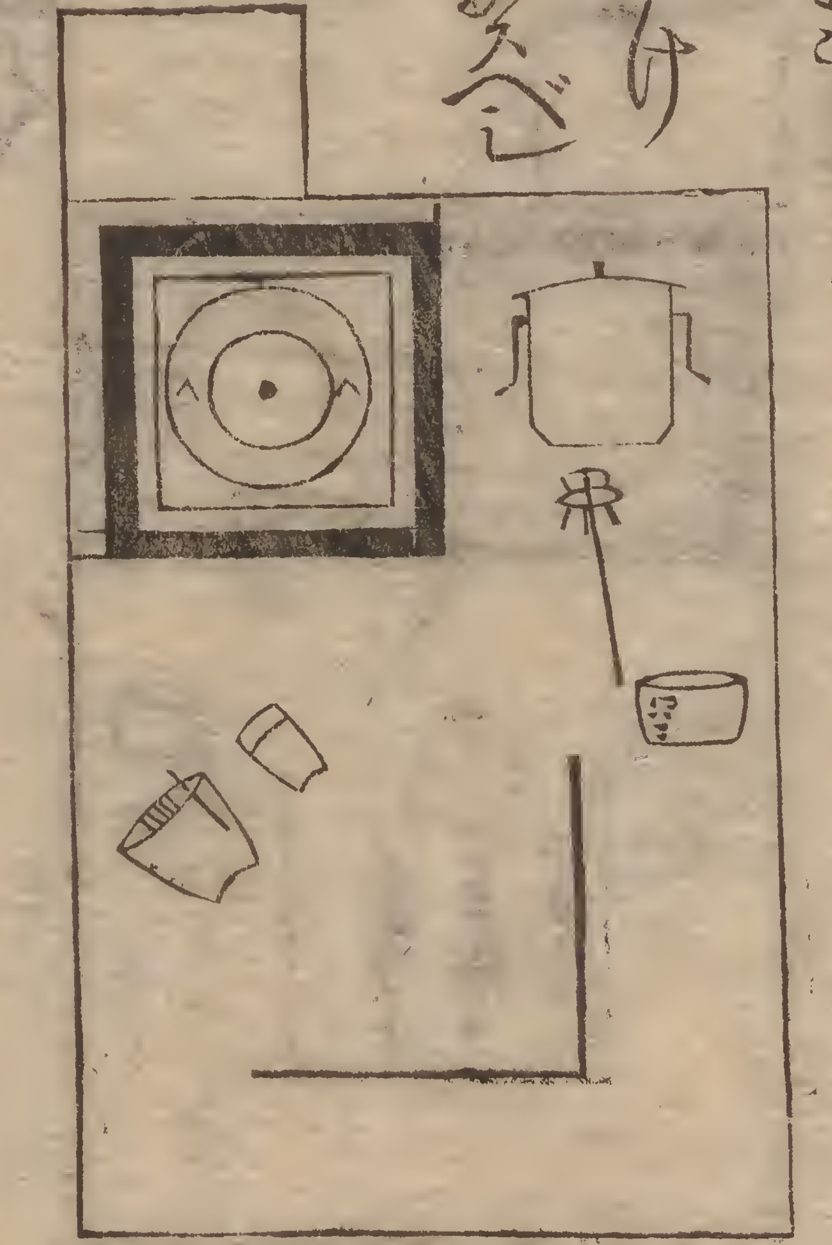
さうをとりてゆひ炉とひざと此三中の墨を
目付け置帛段め付くさ右にし茶杓并巾ひ向へつさ
おし柄先を并置よ
りけ置茶入并出帛か
節遠おさひてくれ置
りかくひけ了し遣
みおくしたかる
帛とれて右へかく
蓋置并おし置き其三つ置きひる大小中と置べし
お八炉縁通よおくべし右かくたせかる帛を茶碗



蓋をと并帛八拂かりたる右にひそくれ湯をとるに入ひて
茶わりかくる二并大杓ひてくのよく炉縁通を左通し
置べし茶筅并く
湯返三つて川とわ并置茶巾れ志ぼりてとらめ茶碗
とめすみくりと湯捨出りを巾ひそくと巾ひ下よ置茶

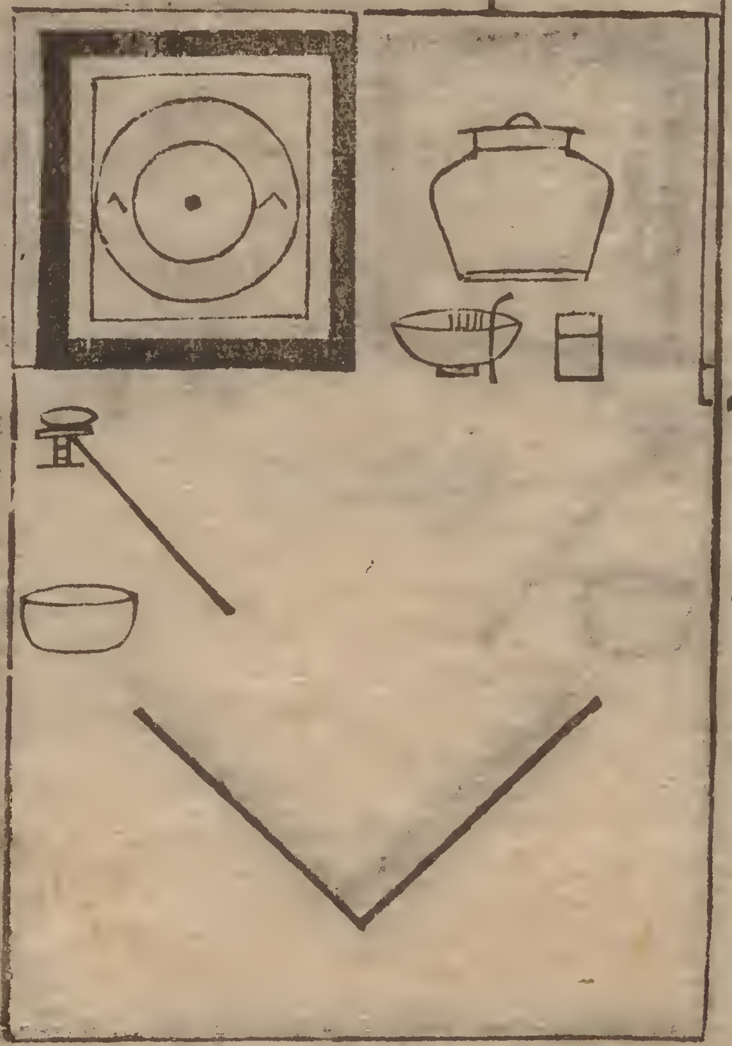


中れとちんさして茶杓蓋に向け茶杓れ棗とそ
茶を組ほどに入出して水指の蓋れ置うけおきて柄杓
取湯を入水をすこし
ちとへかけて茶をうけ
茶を取よくふりあらべし



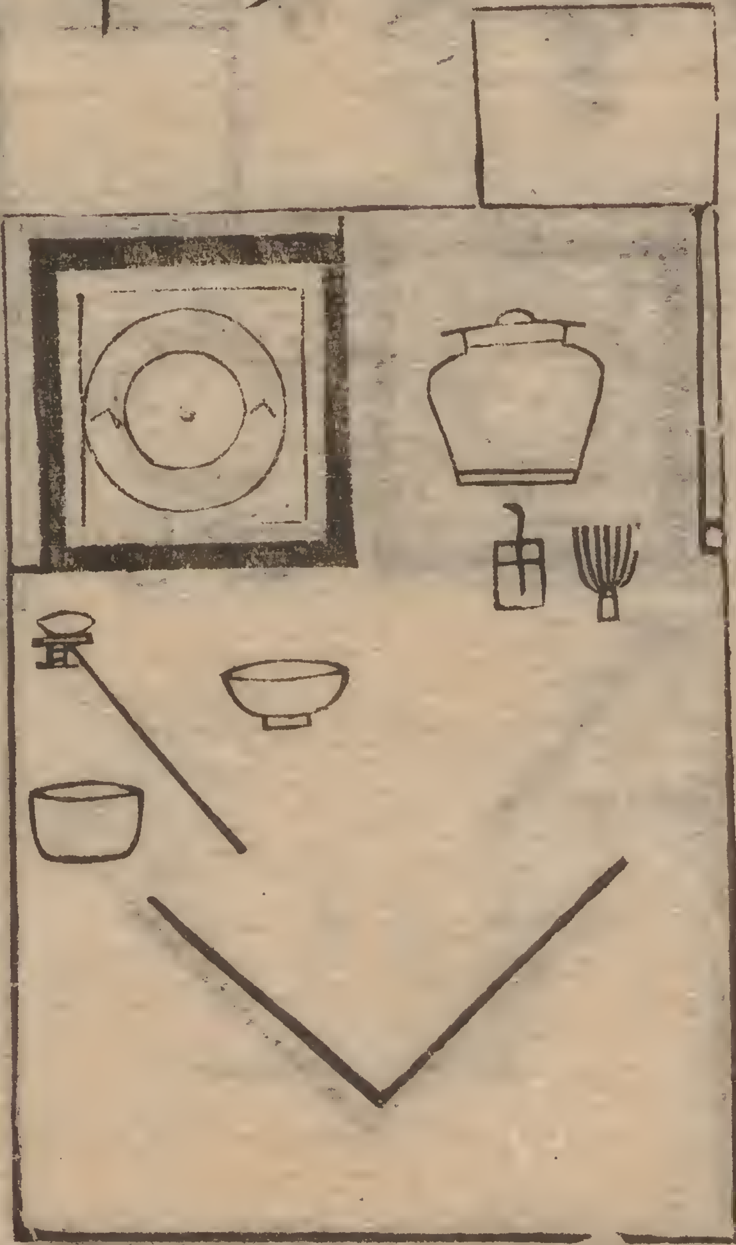
一濃茶ありひおくのこおかかる事なし茶巾茶筅茶杓
此茶碗に入是を取て茶を此後へ出し此後へ茶碗を置下

一色紙半畳勝手角炉夜此ほか
一南蛮物水指中次瀬戸焼薄茶碗此は水こぼし銭此蓋置こ
水指中次茶碗袱帯飾ること水指よりこぼしひらく入た
る事也当なき
いづれも居とする炉
縁を左板畳上天
寺の方同じ様に
居る水指は膝のと

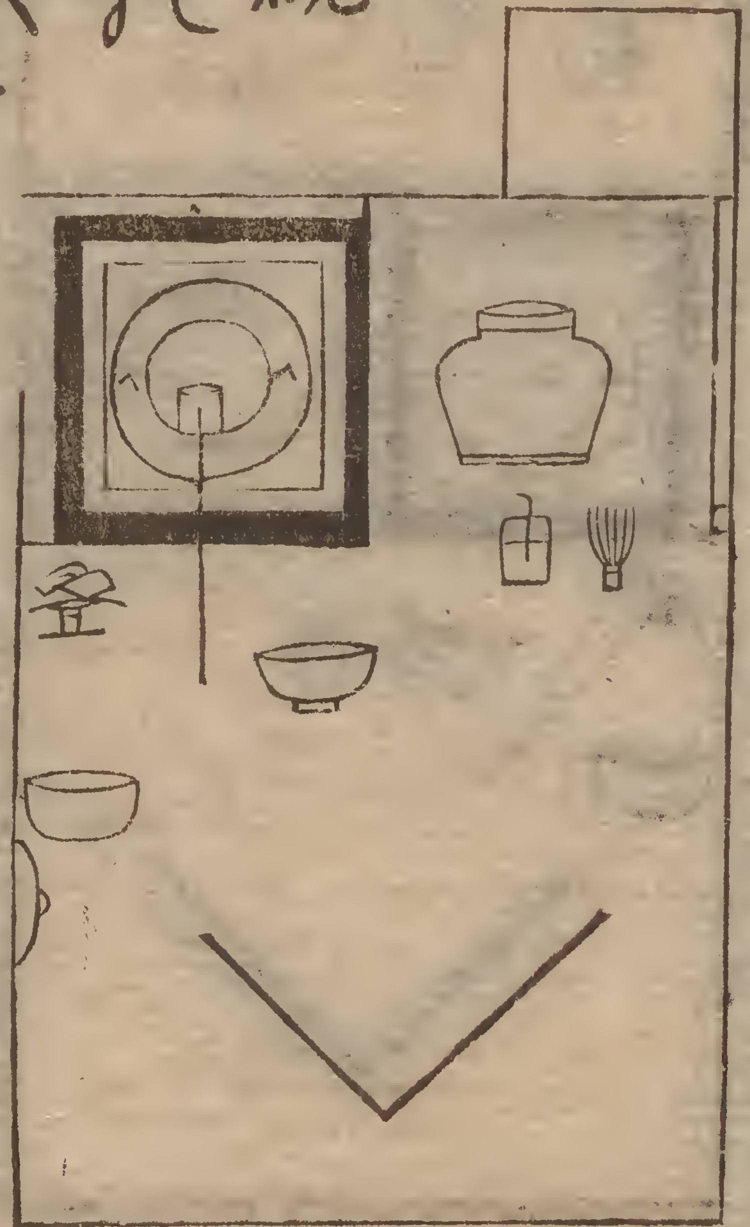


左し柄杓を取右の手に蓋置を取炉縁より一寸ほど勝
手目三メにて柄杓上向けて左の手に茶碗を右へ入れ

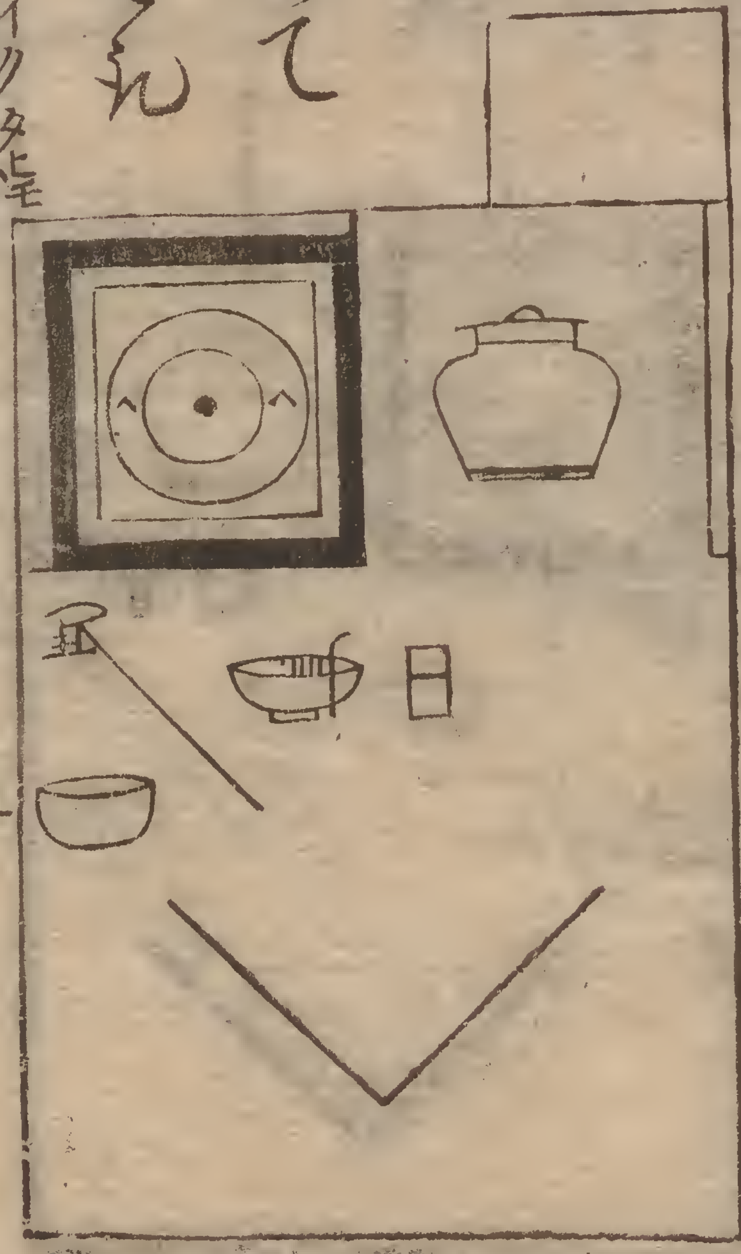
釜炉縁通向をすゑ客人是中次取て右の手へ帛紗
おしたゝみ左の手へ中次取上蓋の上を帛紗にて拂ひ出す
ごとくまた巾ひらく
前水指水差中
通勝ハ炉縁通
右手へ帛紗改め
右のごとく茶杓取巾
ひだりの手に一文字に置る
右のごとく茶筌取ごとく緑有るべく置是有の所に
後ろ有おきてし又中次茶筌を掛通てもとの所に



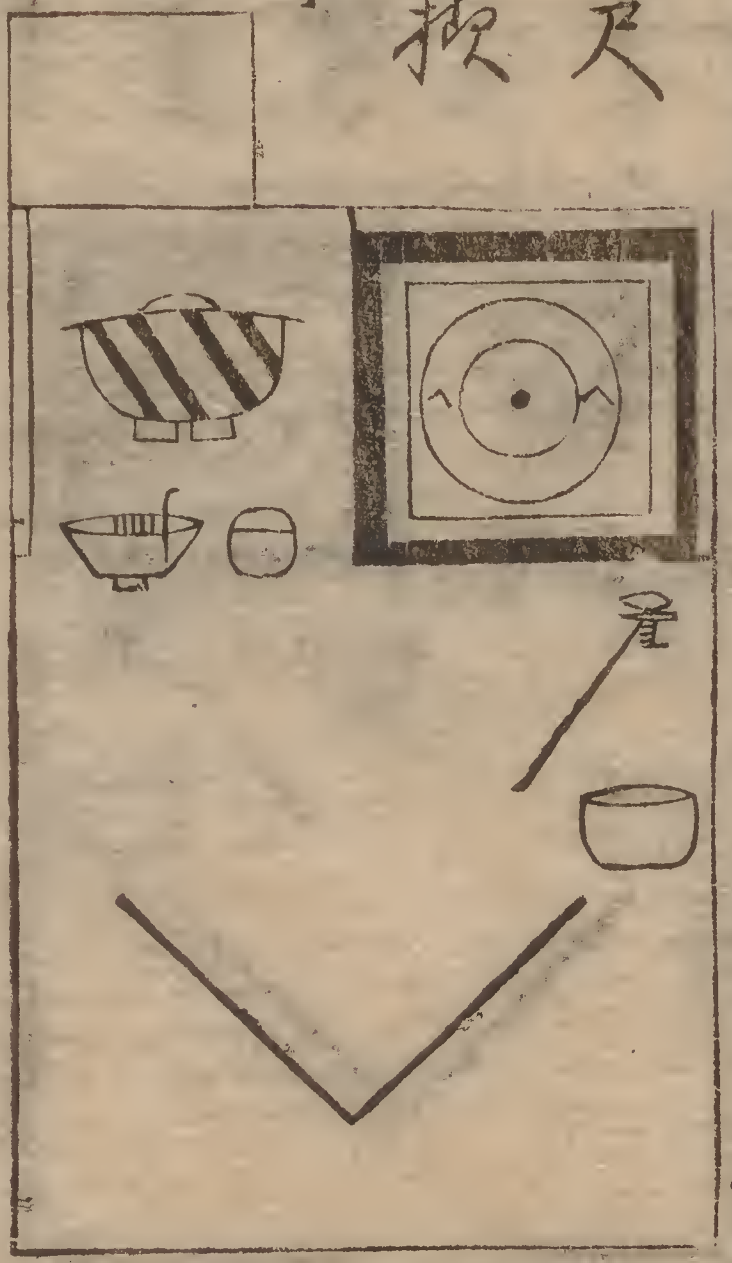
面より水指と炉との間に置るハ手よくを入る由ハ定紙の
手前とハ云ともに畢竟此手前ハ水指の出角炉とをあり
草津なとも茶碗の
置所盡儀きちや
さん八炉縁通り
右の方なる茶碗
脇ひはなる八畳には
へ置通るやと曲尺に
とるべし右のごとくひきそれて帛紗を持へ置も此蓋を右
べし帛紗ハ膝にさして茶巾を左の手に此蓋上に於て



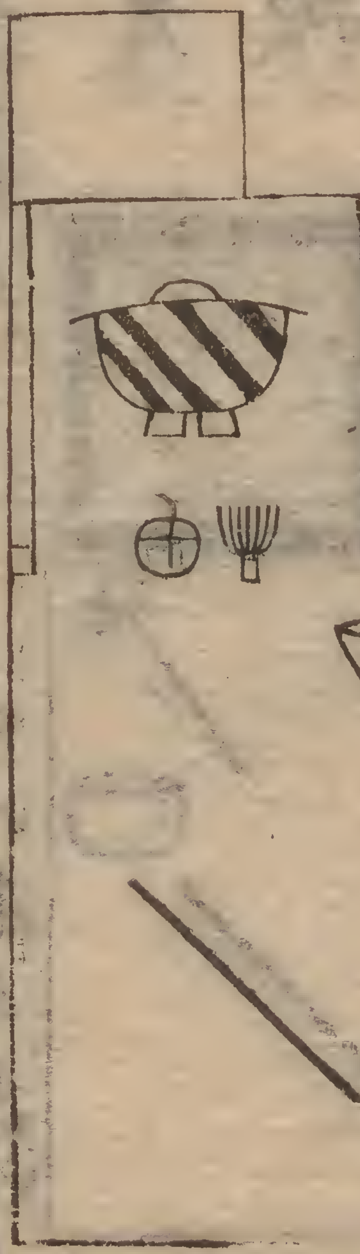
湯をくミ茶碗に入柄杓置合け茶巾をとり湯次三つして茶、
巾とぼりてとり茶碗取上湯捨巾ひき常の茶杓取て
中次取茶を掛
茶ぎれ入水指れ
蓋をとりひきとれ
湯を入水かへめて
茶わけ茶碗とれ
能をも出しべし常度くも同じ也
一 泊めかうる手前ハ中次茶碗泊め常ノ外かまへわるく作
まいりかし



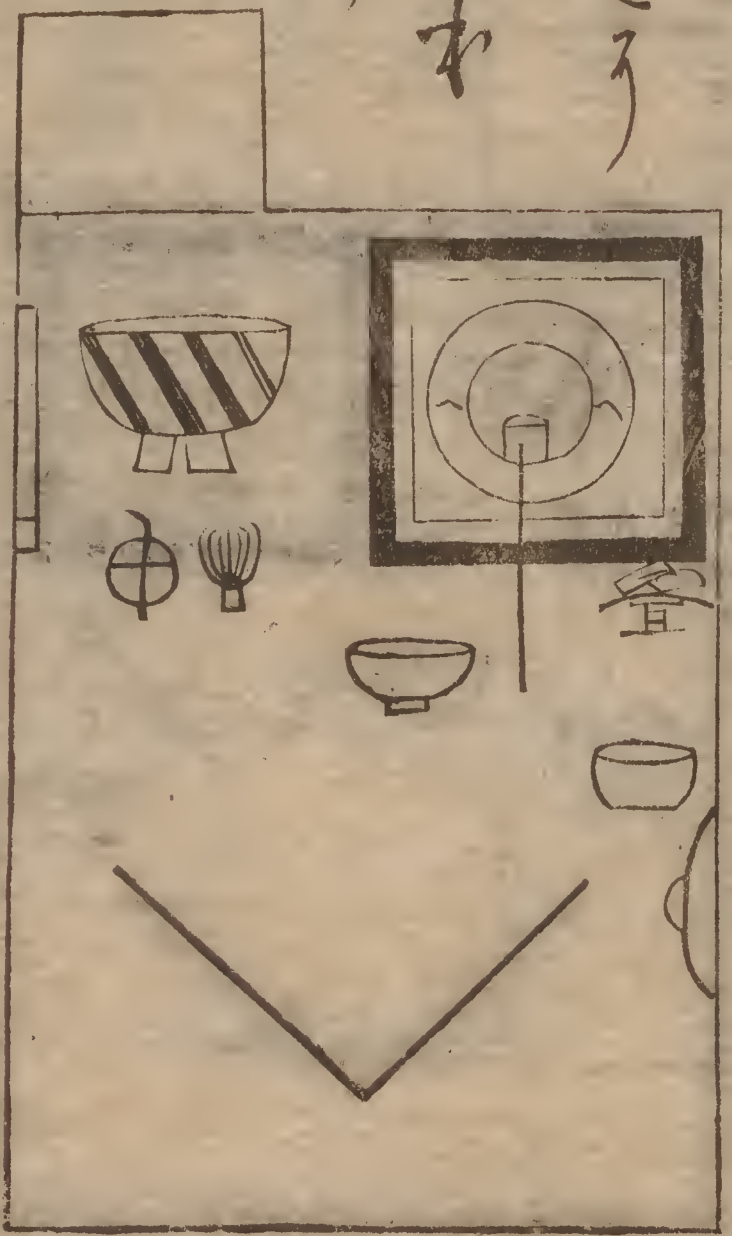
一 置半遅掛手角炉入此上置
一 唐金筋の水指皆具此九重てバカりとり此茶碗清ミツの鏡
此水翻也ひきとりて置くにぼしの入掛も置茶立くし
炉をさる事一尺
其時面方同し掛
前座くひきとく
座めくれ左へ後
し蓋置れ出し
常置炉縁と手をかたはに置目ニメ此け置へし 柄杓
ハずしを取出し左めくすすを置へし 茶碗を取し



扨炉縁通向ニ手ヲ五歩だん退(コシ)帛紗を取出し捌きて左
の手へ移し此丸き釣釜の蓋(ニハ)をどうぎょと中
ひ置たくべし
帛紗捌きして茶
杓ぬぐひ茶入置き
茶碗取りくべ
右の手へひきて
取帛紗を持ち釜の蓋を茶巾と置此ふたの上へ(ウケ)
帛紗を(ニヽ)ひらき湯を汲ひ茶盌をよけ茶筅を
こぼし三ツ一て茶杓置き茶巾置はりて



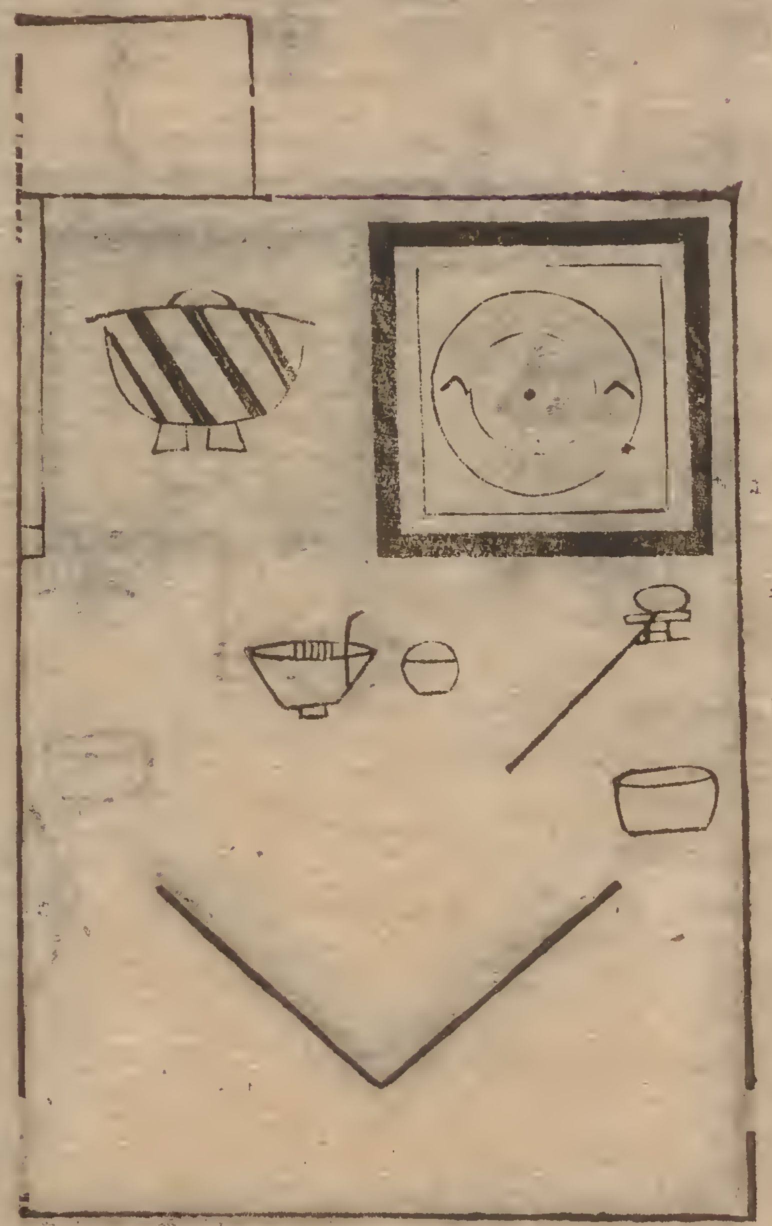
ため茶碗へ上湯を汲(スヽ)ぎまハしよくゆひてこぼし巾ひ
下へ置茶巾を上にふき茶碗此蓋のうへ置ほどけ茶杓
取出し茶巾を上ふき茶碗ふたおり
おきて茶碗を添どうり
入れて此蓋して右
左へ遣(ツカハ)し茶的(ヤリ)
をうけ水指此
蓋を取置き
ひしやくに湯を入れてこぼしかしとやかに加(クハ)へて茶筅にてたてハ
くと幾(イクタビ)もふりおへおとすべし茶碗も湯すゝぎまで



して一度(ド)に茶巾をふく也立(タツ)べし

一濁(ニゴリ)茶の時は茶巾にて茶碗をあらへよせ茶をたつべし

しき茶杓ハかろくすべし



一画を書き逆勝手(ギヤクガツテ)角炉(カクロ)躙(ニジリ)あがり

一唐金(カラカネ)唐人(トウジン)物巾(ブツキン)水指中次肩衝茶碗右此二ッ水覆

あ茶碗に建水(スイ)置る右のひざ炉縁より八寸ほどのひざさき

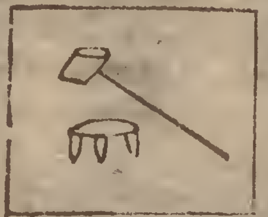
炉縁へ通し

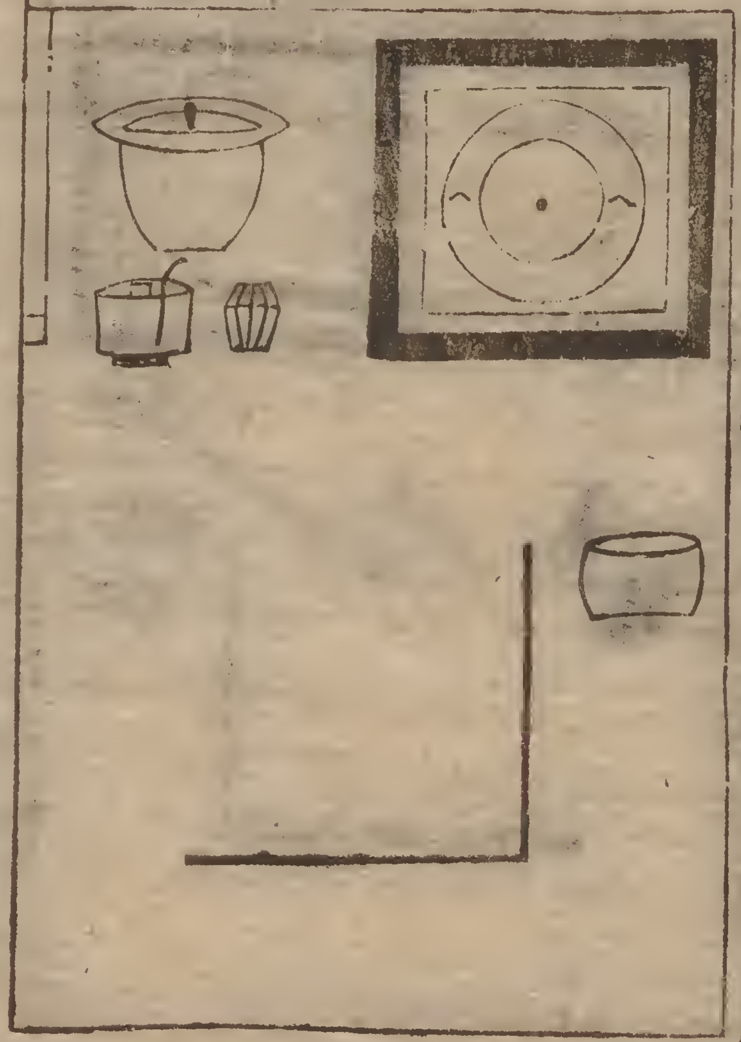
其外茶杓なり建水(ケンスイ)は

茶巾たゝく

茶碗を右へ

うつし炉縁ひき

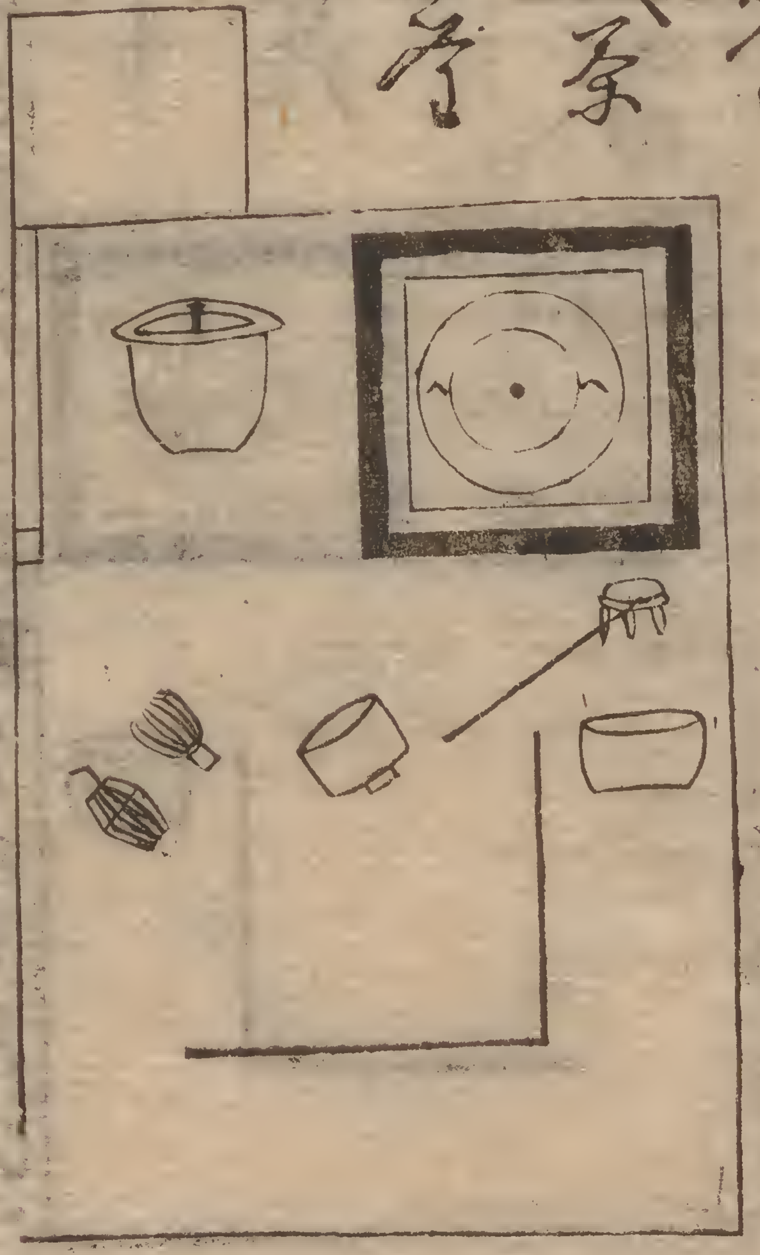




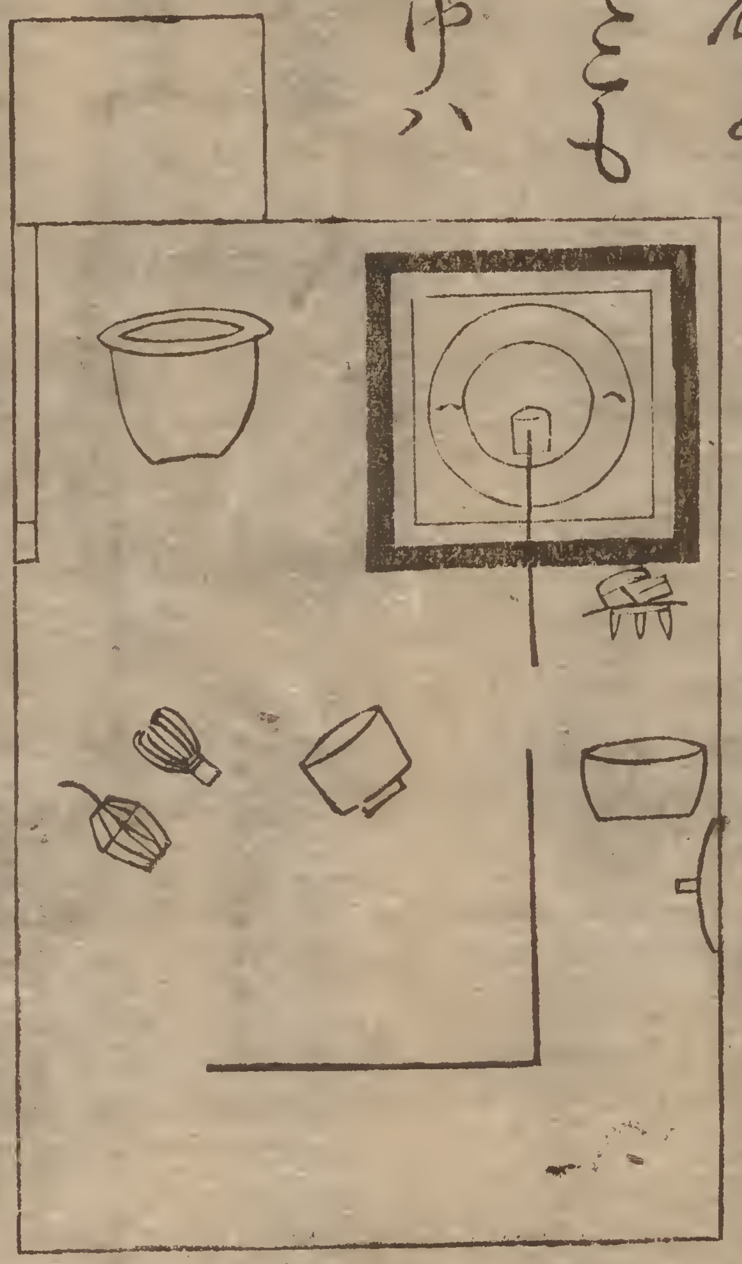
茶碗は茶巾にて炉縁の間(アイダ)茶杓も足越(コシ)右中く中次右て

茶巾にて白布の右のしておへ茶杓へ置(ハウ)いひ

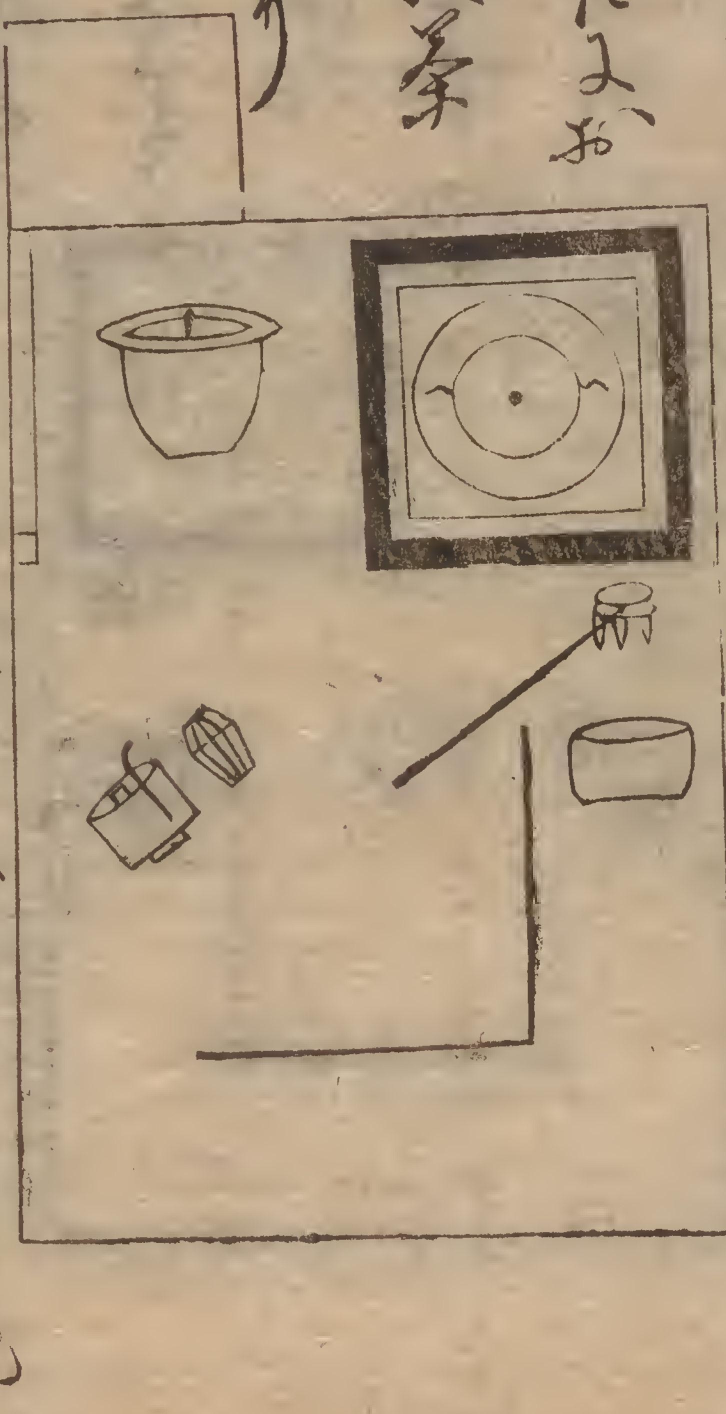
まへりをとりて巾ひ嘗たれ柄杓に八すめり
向(ムカフ)並目にかきく釜帛(サウ)にちぐさして茶杓(シヤク)取中ひ
中次よりけ茶入を
取く嘗るべく茶
碗に置へり茶入を
ことへ帛にこ
しめをはるく
茶巾取く洗
打ちぼりて茶巾にぢぐさして又茶碗に入柄杓
まいる蓋置取かに釜帛を出し以上



蓋取帛掛よりさえひきて取湯を入柄杓に
茶よりけ茶入を取て湯次(トリガデ)三つにて出す置へ(ツカ)き
茶巾取茶碗取上
湯捨(ステ)上り巾ひそこも
中ひトりよ釜茶巾八
嘗る茶入蓋へ
上茶杓取中次
取茶を能ほどりいれ此時して手指れうちをそ
ひやくれ湯を入まかゝへあひて又け茶筅(セン)取て
めあぐさよあへおきべし



一 次の茶碗をとりて御湯を茶碗ニ入右せそれを
すゝぎ捨又ひやくの湯を入其一手の分を茶碗よりさきの
へまゝ入ひやく茶をうけ茶筅をれば湯ハくとふり其湯捨
して茶筅ありよおへ
き茶碗の湯捨茶
巾をすゝへ入下り
亦茶入をほ
の下へあるを取よ 置 重 茶筅をのあとへ遣し茶碗を
中次の口へ遣し取別の蓋つまみ又湯をかけして置め蓋之
茶の蓋して ね捨うけ水指の蓋をするなり



太要

一 臺子ハ唐より渡る茶道の根本とする中にも
いろくと分もあり其程をあらく長板おおに長板
切く小板風炉とある 風炉をあらく置本の風炉と板
次第くよかりとなくなること
一 臺子の家の作り様よ依く来客の居を数とあり
居をたく事を云居として構へ手に入 以逆
他の依之臺子並様ハ迄の作る分答 可ろとなし
一 臺子の風炉ハ其の方ゆも構への方に並様 数寄改
の事也 此故 ゆ 用ち構手ゆ 右君の風炉の手 あかぶり 何の

廻揚手ハ左右此足拍子にて打合せ留るを廻と云
一 鉄手ハ打揚手と出拍子角拍子此二ツにて何も廻
揚手ハ出拍子角拍子の四ツを文字数拍子にて八ツ
のうちに納るに何ぞ足しても宜しむ

一 先生此家の大事として十二ヶ条に及ぶといへども
又此事ハ秘門第一にもお伝うるといへども三結集に
も流伝集にも茶湯由来をしらずして出まかせに上
て記すべしといへ共此外の一通り手有るにて入るべきにや
如し其故は鉄揚手に廻揚手ハ廻りよりて
つと八ツ此外ハ記す凡十二ヶ条にも廿六のあしらひ

有其外に十二ヶ条ともあるに至つて大事此を秘し終にも
此伝書にて八分通りにも先書を残さず示して此外ハ相伝
済事となし給ふとも事紀すとて絶ゑも初学のために
此を届ぬ所にも写させし不双此手のからし心得たる人へ他見
此書にて見せ申へし

皇都隠人

遠藤元閑敬記ス